

明治參拾七年六月貳拾四日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第參拾八號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第三十八號目次

論 說

紫光兄の「鴨長明」を讀む
予が神秘主義

白雲生
古川如翠

雜 錄

英國貨幣に就て
聖アウグスチヌス(續)
心靈漫筆
義務
一言を許せ

浦井恒堂
森内政昌
G. T. 生
鴨水
飯森梅男

文 苑

紅蘭
岩淵山
花の香
紀伊庭八郎事

水衣
堀田相爾
斗牛
村上函峰

森の泉
小詩六首
和歌
俳句
青梅句稿

及能秋風
篠原水衣
秋風
紫雲
外圍生

雜 報

紅緑代謝。出征軍隊を送る。征露の歌。磯田教授吉崎助教若林會計掛を送る。吐月峰(續)。所謂不平家に示す。無駄口集。第二回三縣聯合庭球大會報告。弓術部大會。

寮 報

時習寮第三學期大茶話會記事。衛生講話。

附 録

辰ノ口村附近行軍紀事。從軍餘談。第八回春季水上大運動會紀事。寄贈雜誌

北辰會雜誌第三拾八號

論 說

紫光兄の「鴨長明」を讀む。

紫光兄足下、足下獨得の才筆舊によりて益々雄健なるを賀す、詩歌に論議に足下嘔心の餘瀝滴る所、椽大の筆劔至る所として光忙燦然、才華亂發の姿體を極む僕私かに艶羨の情を禁ずる能はず、頃者架書を拙きて北辰會雜誌を得、端りなく足下精嚴雄麗の文に接す、乃ち鴨長明の人世觀及世界觀を批判したるものなり。僕之をとりて讀み滿紙彩粉の芳ばしきを覺え轉々足下明透の識に服す、

あゝ清婉優麗の方丈記一卷、人は其の哀婉雅優なる香筆に酔うて偏に紙背清驅鶴の如き古法師を觀到する能はざる者の如し、而して僕、今亦足下の才筆に酔うて古法師のれも影を忍び、草庵の裡松風に世を通れし其の人を追懷し、幽趣まことに禁すへからず、希くは足下、僕が足下の作に對して起せし縷々の感懷を披瀝するを得んか。

白雲生

亂離の世古より多し、而して史を繕きて彼の平門興亡の世紀に至り、吾人は當時の都人士が遭逢したる敗殘離壞の固に哀れ深きに感じ、轉盛衰其の地を代ふるの忙々促々たるを痛む者なり、遷都の騷、はた都落、悠々として洛陽の春に舞ひし都大路は、そも如何ばかりの驚愕の念に堪えざりしかよ。保元の悪夢、平治の怪幻、さても矢叫の響は未だ其の眼底に映るひ、其の耳朵にささやく時、人はげに風聲鶴唳にだも驚く。よしや西八條の夜櫻に直衣の袖を緩ろげて管絃の樂みに狂ひ、溪歌漫舞のたもかげは春の日に婆娑たりしとも、誰かは遷都に次ぐに都落もの悲惨、急激なる轉變の相に心動かざる者ぞ、あゝ鳴長明、彼は實にかゝる時代になりぬ。

大火、洪水、地震、飢饉、かゝる甚激なる悲劇的天變地異は彼れ長明の青年時代に於て頻年畿内の地に禍しぬ。凄慘叫喚の巷は多感なる青年の腦髓に如何なる印象をや與えけんか、一夢去りて一夢また來る、愁々の聲は修羅叫喚の響に應ず。馬蹄、夜半の寂莫を破りて旭將軍の鐵騎は比叡の峯頭より落し來り、地を動かすの聲鼓は宇治瀬田の渚に寄せ來れり。六波羅の幕營は焼けぬ、西八條の書棟彩樓は倏忽として煙塵と化しぬ、さしも榮華にはこりし京白川四五萬戸は忽然として焼土とはなれり。家は焚かれ財は掠めらる、生民何の罪ありて是の慘に泣く、親子妻弟離散し盡す、京洛の人何の因、斯の如き災禍に遭ふ。長明は實に此の悲劇中の人なりき。

あはれ佛說無常說に聽かざる者も、亂離此の如く流轉の激浪斯の如き世相を觀じては、如何ならんとも其の夢なりし榮華の春を忍びて嘆せざる者ぞ、誠や彼れ長明の方丈記一卷を縫ふ厭離の調はげに時代思潮の彫鏤せる無體の製作品なりき。さるにても、彼の「運命我に於て浮雲の如し」

と觀しげん高踏超越の達人も一旦流離の蹉跎に遭遇しては流石に絶叫天に呼びしとか、我長明が方丈記に於ける厭世の調遂に理なきにあらず、

二、

紫光兄足下、『長明は實に厭世の隱士にして暗黒面の世相を見て、光明ある世相を望む能はざりし人なり』是足下が第一喝棒を長明の頭に加へたる宣言なり。然り、方丈記巻頭の讀み去り讀み來りて讀者の胸裡に彷彿する著者の幻影をたゞれば吾人眞個に這般の想念の鬱勃たるを覺ゆ、方丈記の一篇畢竟此の數節に與えたる註脚に外ならざるか、僕大に足下の眼識の異常なるに服す。

然りと雖も吾人方丈記一篇を讀了して一種厭世的清婉の思想に逢着するを拒む能はざるも讀破數回、其の裡面に流るゝ暗潮の調節最も聽く可きを會得し能はざるか。泡華流水、あぢきなき塵界の世相を暗頂するに痛切凱切なる豫言者的説教を試み、有相に執着する塵骸に對して、冷々の利劍を擬すと雖も、其裡亦父老が孫子に訓ゆるの懇切なる辭句に接せんはあらず。あゝ老莊の恬淡に虚無の都城を望み佛說無常無我の境に涅槃寂靜の聖地を憧憬し、心外無別法を講じて三界唯一心の悟境を觀せんとする彼れ、果して無用の隱士として排拆し去る可きか、果して光明の面を觀破して之が樂を享受する能はざりしか、僕私かに足下と議を異にするを憾む、

足下よ、足下は彼を以て高遠偉大なる理想を欽如する者と斷せり、深甚微妙なる教理の理解、崇高敬虔なる道念は彼に於て乏しかりしと宣言せり、あゝ是れ我長明を批判するに最好當なる法式なるか、抑も亦正當なる宣告の理由を有する者なるか。私に思ふ、僕讀書眼に於て大なる徑程

を足下との間に認むと、足下の宣言斷決せし處果して其の肯綮に的中したりしか或は僕の信する處我長明の肯するものあるか、是れ議論の分枝する契點にして僕の以下に於て聊か卑見を陳述するの幸榮を有する所なり。唯是僕が讀書眼に映せし短見のみ、希くは足下の宏量を要求す。

三、

『一社司職の拒請は彼をして儉々人世に斷念せしめぬ、何んぞ其の膽の小にして意志の薄弱なるや』と、げにや父祖重代の業を繼ぎて賀茂の社司たらんと請ひし彼は之を拒絶せらるゝや驀然として家を出でぬ。是れ彼が出家の動機を造りし最も近接なる源因たりき。

固に世事常に意と添はずして自個願望の最も切なるもの一旦畫餅に歸するや、嫌焉の念、内に燃え、憤々の思、外に發し、遂に脱然其の不快結憤を寧處に散ず。彼長明亦此の隱窠に煩悶して這般の斷行を敢てするに至りしか。吾人思らく或は然りしなからんと。何となれば社司一旦の拒請は唯彼が厭世解脱の決心を催起したる小因にして是其の表面に顯出したる一事實に過ぎざるなり、吾人斯の如く批判するの却て興味津津たるを覺ゆ、否斯の如き斷定の其の當を得るに近かるべきを斷言せんと欲す。思ふに特殊の動機の發動するや其の下必ずや特別なる深因の潜在するあるは人間行爲を批判し評騰する場合に於て最須要なる方式なり。春風一夜、花、階に滿つ。昨夜蕭々の春雨遂に開花の唯一源因ならざる可きは知者を俟ちて識らざるなり、況んや紛々錯湊の人事に於てたや。須らく慎重の體度を以て融羅剖析必ず其の眞筌に入り其の核子を把らざるべからず。輕々に附して深酷なる觀察を顧みざる如きは吾人之を忌む、是れ遂に批判の眞義たるべからず。

可らず。

涼風一夜、蒼々參天の大樹は洞然として折れぬ。謂ふを止めよ脆弱の大樹なりと。

仙洞御所の寵幸に月夕花辰を優渥なる君側に侍し、榮華の夢長閑なる境に幸運を羨まれし彼、一旦其の要求の容れられざるや去りて山林の人となる、這般激變の事態、豈尋常一様の行動ならんや。

「しつみにきいまさらわかのうらなみに
よせばやよらんあまのすてふね」。

仙洞の奥、下界の批量を許さず。春の夜のうたげ閑るとき錦帳の影に暗愁の幻あり。唯其の秘に至りては遂に他の窺知を許さず、詩人之が微を歌ふ可なり、批評家其の幽を闢く可なり、唯想像の翼は其の鍵を握る或は得ん。足下の彼が出家捨身を以て彼の小膽、意志薄弱に歸する少しく其の酷に失せずや。古來、出家の人多し而して何れの其の最近動機の小膽意志薄弱に似ざるもの少し。若し足下の論法を以て古來の名僧高聖を批判せば如何に悲む可き結論を呈出するかは、惜む可らずや。

四、

「しづかなる曉、此の道理を思ひつゞけて自ら心に問ふていはく云々」

右の一節は方丈記最後の文句なり、史家の考證によれば此の方丈記は彼が此の世界を辭せし前年乃ち建曆二年の作なりと、之によりて見れば右の一節は少くとも彼が晩年に於ける最終の信仰

告白なりと云ふの適當なるを感ず。吾人方丈記を繕き來りて此の一節に至れば前半痛切なる警世的厭世の聲は頓に消え去りて悠揚たる敬虔誠心の福音を聞くが如し。激楚痛沈の野に叫べる人の聲は此に至りて平沙淺水鳥歌ひ獸眠むる平和の境を説かんとす、恰も是れ急湍飛瀑落下千丈、深潭碧を湛ゆるの感あり。此の時吾人の眼底に寫象し來る長明は念佛三昧の行業に餘念なき一個精枯なる老漢なりき。

紫光兄足下、斯の如き寫象は果して僕自己の臆斷なりとすべきか、斯の如き老僧の信念告白を以て冷笑の視線を送るに恰當なりとすべきか。熱烈沈痛の憤火山的活動的の信念にあらざるば眞個の信仰と稱賛すべからざるか、吾人疑なき能はず。又曰く、

「南に假のひがくしをさし出し、竹のすのこをしき、其の西に關伽棚を作り、中には西の垣こそへて」云々

松籟窓に落ち、水聲無絃の琴を晝夜に奏す。鶯鳴けば浮世の春を知り、木草、葉黃ばみて秋の風をきく。桃花流水宛然として去る、別に天地の人間にあらざるあり、是れ此の境なり。白雲深き處、老僧在り、是彼の境遇にあらずや。吾人寧ろ一種の美的生活として之を羨む。固に周梨槃特の行業は八萬の法藏を暗誦するに勝れりき、論議の宗教の遂に體識のそれに及ばざるは眞實なり。しかも彼れ長明か自己行業の周梨槃特の行業にすら如かざるを嘆き一念無漏の都にあこがるゝ時爰に唇邊唱佛名の聲あり。嗚呼是れ人間可憐の性情の發露にして清淨業を尙ほ人寰に修する者の必然到着すべき境地にあらずや、必ずしも足下の所謂「苦しまぎれの笑」たるを要せざるな

り、吾人道を求めて尙未だ眞境地に逢着せざる時、或は既に其の悟境に逍遙せりと思惟するも一旦悚然として忘念煩惱を顧慮するの刹那吾人は劣惡凡夫の眞性を自覺すると同時に吾人の頬邊の苦笑と歡喜と并び惹起するを想ふ。苦笑、あゝ這般の苦笑一番は實に人間蒙昧の無明を證明して餘りありと雖も又此れ可憐なる向上一路の棧路にあらずや。唱名念佛は歡喜踴躍の感謝なると共に一面罪惡障礙の自覺心に鞭打を送るの精進懺悔の祈禱なる可し。足下希くば彼れが未だ眞悟地に到入せざりしを罵るなかれ、彼は少くも刹那是刹那を追ふて精進の道に力めつゝありしなり。足下が彼の老莊に通し、萬法唯識の學を極めたる故を以て彼の悟境の可否を云爲するが如きは是れ知を以て信を強ゆるものにして、大に不可なるものなり。

五、

紫光兄足下、足下が第二章の劈頭に於て長明氏に對して下したる痛快なる宣言は其の鋭なる眞に鉄錐枯骨を碎くの概ありと云ふ可きか、惜哉足下の鋭利なる鉄錐は枯骨壊破して餘ありと雖も地下の長明は其の餘りに嶮惡なる斷案に驚くなきか。足下は既に其の根本に於て僕の立脚地と異れりと云ふべし、爰に至りて僕が驚々の辭を陳ねしことの隅々足下の立論と衝突せしを悲む。足下が滔々として數千言を費して長明氏の人格を論じ信仰を解剖し來りて正に言はんと欲する處は實に此の章にあり、今にして思ふ爾前足下滔々の辭は唯是れ此の章を言はんとするの前提のみ所謂豫審なりしのみ。足下は彼隱士長明に其の活動的誠熱を強むんとするか、噴火山的教熱を以て彼に余儀なくせんとするか、彼長明の枯骨は地下にありて宗教なる語の甚しく其の範圍を異にするに絶

驚し、人道なる語の餘りに義務重大なるに驚倒せん。嗚呼足下は時代を忘却し特殊の人を無視せしなり。

佛陀は誠に執を去れよと説き玉ひき、無執無着そのものゝ價值は吾人の茲に論議せんと欲する所にあらずと雖も、無我の價值に於て絶大なる眞價を認めんと欲す。而して彼の佛家の無我觀は無常觀と聯環して佛教哲學の大系を組織す、其の組織の偉大にして深遠微妙なる結果、其の皮相を觀察して未だ其の堂に昇らざる輩彼の淺薄なる厭世主義を以て強ゆるに至れり。彼等は眞の厭世主義の如何なるかに思惟する違あらずして漫に之を罵詈せんと欲し、却て眞の厭世主義の學道入門の最捷徑にして而して其捷徑則ち道なるを遺却せんとす。「若し厭世そのものを以て佛者の意なりとせば世に忌むべく遠ざかる可きは佛教なるかな」と、足下の此言、僕其の内容如何を知るに苦むなり、長明の山林に入りしは足下の所謂厭世的原因なりと許すも、既に其の出家後に於て道を修し行を勵まんずる長明の山林生活を以て直に厭世の人と呼ばんは其の當を得ざるにあらずや。此の塵界を厭ふて自ら華嚴の瀑布に投ずる人は世の所謂厭世なり、何となれば彼は自ら生命を斷滅して死に歸せりしを以てなり。長明の山林に隠れしは大に其の内容を異にす之を目して厭世家となし嘲るは我其の何の故なるを知らず、昔者伯夷叔齊、周の粟を食はずとて首陽山に飢死す而も孔聖之を以て義人と稱せり、然り義人なり、決して足下の云ふ厭世家にあらず。厭世には希望なし、光明なし、唯一死あるのみ、長明、山林に隠れて塵界と絶つ而も彼には希望の存するあり光明の存するあり、假令其の希望、光明の俗界の品彙ならずとするも豈之を以て彼を棄つ可

けんや、足下錯れるにあらずや。

足下、長明を論じて厭世の徒となす、華嚴瀑布の厭世か、將た首陽山の厭世か、思ふに足下は兩者を包含して之を言ふものゝ如し、然らば僕は足下の云ふ厭世主義なるものに多大の尊敬を拂ふを敢てせんと欲するなり。現代功利主義の糟粕より醜醜せし一種淺膚なる樂天觀の亞流者。厭世主義を以て蛇蝎視し嫌忌す、あゝ何の故ぞ。嗚呼厭世主義の誤解せられたるや久し、人は厭世てふ語を聞いて既に遺傳的聯想的の感情を附和し、賸々者流の讒誣罵詈至る處其の惡聲を弄す。然りと雖も之唯痴語のみ何等の影響を厭世の意義の價值に累せざるなり、嗚呼躬ら厭世超脫の境に逍遙して天與の消息を理會せしむるものにあらずんば焉んぞ其樂天地を想像するを得べき、靜寂、無我、枯木死灰と見ゆる處、清冷地大建設の樂豈世の肉食者流の窺知を許さんや。

足下彼のトラピスト一派の行者を聞けりや、彼等の修道院にあるや緘黙無言、粗衣粗食に甘んじて一切の聲色を絶斷し、偏に一神の渴仰に専念す、若し世榮に狂奔するものより之を見れば何等の痴戯ぞや、然れども誰か知らん彼等の生活には實に王者を艶羨せしむるものありとて存するなり、彼等は厭世的教徒なり、非社會的教徒なり、足下の所謂枯木死灰的人類なり、而して足下の排斥せし非活動的の宗教信者なり。かゝる行者は足下が全力を盡して之が滅絶を計るものならん、然れども記せよ、彼等は少くとも無我無欲の聖境に肉迫しつゝ希望と光明とを緘黙無言境に獲得しつゝあるなり。吾人現代の趨勢中、一派の清流這般彼等の教團を想ふごとに尊敬の念咄々として禁ず可らず。富貴名利の外に人生の樂地を求め得たる彼等は實に幸なる哉。長明の歌に曰く、

つきかげはいるやまのはもつらかりき

たねぬひかりをみるよしもがな

六、

紫光兄足下、足下が結論に於て提出せし斷案は之れ寧ろ道學先生の亞流にあらざるなきを得んや。時代を隔つる幾百歳、異地の法規を提げて直に之を越の邊陲に實行強制せんとするの類なり、吾人竊に足下の爲に憾む。何となれば長明は是れ理義の境を超絶したればなり、其の却て辯せざるの却て辯するに勝るを覺ゆ。

紫光兄足下、是れ僕か足下の文を讀過せし際に惹起したる卑見なりき。僕元來淺才薄學のもの、焉んぞ文學に忠なる足下と争ふの勇あらんや、唯是陳言のみ足下の指教を受くるを得ば僕の幸何物か之に若かん、踈漢徒らに足下の芳薫に醜齎を加ふるのみ、敢て放漫の筆を弄びしにあらず。足下請ふ恕せよ。

予が神秘主義

古 川 如 翠

こは予か信仰より生れたる神秘主義也、從つて其論旨或は他の所謂神秘主義なるものと自から徑庭あるもの、如し、されど予は信ず、齎しくこれ神秘主義也其深奥の最大主義に至りてはつひに一途に歸せん、乞ふ予か最後の主張を見よ、こを草するに當りて別ちて五段さなしぬ、されど其餘りに長篇なるに由り中二段を除き第一段と終りの二段とを茲に掲ぐる、こ、なしぬ。

一、

煦々たる温光野に山にみち今や駘蕩の陽者吾人か眼前に展開し來り惠深き天地は吾人を驅て油然と湧き出する生氣のうちに浴せしめんとす胡爲れば單り鬱々として隘室に籠り、齷齪として乾燥なる學課に執着するの愚を學ぶことをやする、出でよ來れよ、天然の野は吾人を招て此處に充分なる教育を授けんとはするなり。

春は淺き森隱を逍遙し、彩雲纒く丘を蹈み、嘯聲幽閑、冷泉湧くの處、青苔に座し瓢簞を傾くるもの、之れ皆な悉く風流の人と言ふを得んや、天然の美に酔ふ豈管に文人墨客の業のみとせん、乍併若し夫れ此等仙郷に入るの時んば、自うら損益を忘れ利害を離れ陶然として一種の美妙に打たる、あゝ此美妙、それよ、吾人かもとむる所。

彼等無學の徒若くは凡俗の眼には青草萌出づる山、落花恨みの野水の流、其れや何等の意味を有する。花見と叫び遊山と騒く、されど心は其處にあらず、酒盞あふいで醉戲喧囂落花の前、清歌妙舞のそれならで、まことは一時の鬱散のみ。俗人には万物皆俗、凡夫には百事皆凡、奈何ぞ、這般の美妙を感じ得るものぞ、然りと雖も彼等も亦た人縦ひ墮落の淵に沈みたりとも、其肖侔やもどこれ神の形、彼等の心情に立入りて見なば、必ず一種名狀すべからざる勢力の汪溢たるものあるを知らん。彼等には山や、花や、水や、雲や、此等決して何等の影響を與へざるも、而も其間何處ともなく其か心神に流れ込みたる一の偉大なる力を感得せしならん、試に彼等に問へ、抑も這の遊山果たして何の効果ありやと、彼等は必や答ふべけん、浮世の塵を離れて甘酒に酔ひ、絃

歌に舞ひ、樽を敲て謳ふ其心地、積年の鬱悶は一掃せられ、軀體の疲勞は何時しか平復し、心身共に生々潑地の活力の加はれるを覺えたりと。あゝ然り、況んや一步進んで其幽玄深奥なる一種の靈氣を感得し得べき者に於てをや。果たして然らば自然はそも何を教ゆべきや。

夫れ、教とは引き出すの義也、唯それこれを誨へ、これを導き、所謂其神魂にあるものを引出しつゝある間に、其情念、其思想が自然發展し來るものなり、教師か兒童に花なるものを教ふるは彼等が腦中に梅の花、櫻の花、牡丹の花等種々雑多の花を描出せしむるの謂なり。乍併、吾人が月花に對し之に寄する感想は果たして、凡俗徒の如くただに月、花其物の色彩形狀をのみ賞するの心と同一なるべきか。吾人は晴一空の夜氣に高く懸れる月を眺め、爛熳たる花彩の間一片二片風なきにこぼるゝ落花の舞を眺めては、必ず一種の神氣を其間に認むるものなり、聖哲の心情を悟るものなり、これに由て吾人の神魂は引出され、吾人の思想は一層の富を増し、情念は益々濃やかとなり、心身共に尊き洗禮を受けたるの感を懐くに至るなり。

既に凡骨也。爭か這般の感念を賦られ得べき、されども彼等も亦た既に好き月と云ひ、美しき花と云ふに非ずや。然ば縱令、其間に深奥なる感想を懷き得ざるにしても、而も美妙的の教化を受くべき素質を有するものと云はざるべからず、彼等はこれか爲め肉体に雄大なる勢力を賦られ得るに非ずや。

あゝ、自然の教—吾人の神魂を引出して、そこに雄渾の力を與ふるもの、尊き哉、聖なる哉、人類はこれに由て初めて一切の罪惡を忘じ去り、清淨無垢の天真に歸るを得、これに由て初めて神

の靈漿を味ふを得るなり。

宇宙、自然、吾等は幽玄の哲理を論じて然る後に解釋するを要せず。現象即實在の眞理は箇々の物質、種々の科學の研究を待つて初めて知るべきに非ず。直接、自身の眼光をこの莊嚴なる自然界の万象に轉すべくして可也。

ラスキンの謂ひけん様に、時としては柔しく、時としては恐しく時としては又能く氣の變る天空を閑焉として膽め見よ。輝々たる日、炎熱猛き空の模様、雲の卷舒は宛ら氣象万千にして、膽めば膽むる程、莊嚴にして、幽妙にして、凡そ宇宙のミステックなるものゝ代表者、あゝ、夏の空！

野分の悽愴、陰雨の蕭條、落葉の悲恨、歸雁の哀鳴、凡て一身にしめて、こゝ燈影淡なる芭蕉の窓下に膽め入れば、あゝ慘なる自然の秋！

渺茫、無際的大海、千波万波澎湃たるのたゞ中、怒濤逆卷く海岸、風は荒るゝ高嶺の上。これ等自然の万象が吾人に教ゆるものそも、何？

大なる自然の景、其か與ふるあらゆる刺戟は等しく皆吾人の心神に一種謂ふべからざる力を賦ふるを知る。万有の表象、吾人は其裏面に横はる一大綱を見出し得なば、直ちにこれ天道デビニチに入ることを得るもの。

これを切言すれば、吾人に幸福を與ふる最大のもの、金にあらず、位にあらず、名譽にあらず、實に自然界に於ける万有にある也。媚びるを要せず、勞するを要せず、獨り山間の名月と江上の清風とは勞することなく煩ふことなく、眼を上ぐれば即ち在り、襟を披けば即ち來る、嗚呼吾人は

之に逢ふて心を濼ひ、此處に無上の友、無限の感謝、聽ては神と親しく接吻抱懷するを得べきなり。

二、

前節に於て予は自然の大なる力を述べたり。今や一步を進め、其大なる力の顯現に就て一言せんと欲す。

吾人再び自然の變化に一層緻密なる觀察を拂ふべし。汪洋として流るゝ水、彼等は何か爲めに高さより低きに就くか、一葉の舟よく彼等の上を遡るに非ずや、熟せる木の實は何か故に樹枝を離れて地に落つるか、兒童もよく其摘取して食ふべきを知るに非ずや、舟の流に逆つて上り、兒童の果實を枝より摘取するは皆これ一定の目的を有したる一種の力たるなり。

獨り水の流、果實の落下に至りては果して何等の目的を有するか、風の吹き、雨の降り、青草の萌出、活樹の枯羸、これ等はそも何の爲めの現象ぞ、奈何の目的を有せるものぞ。

人或は謂はん、これ自然の數のみ、理の然らしむる所、宇宙の引力のみ、エネルギーの作用のみと、而して彼等は這種の解釋に由りて以て満足し得る也、猶一步進んで、其數、理、力なるものゝ本源は何其活動の目的は何と問ふことあらば即ち默せんのみ。

あゝ、自然の變—予は直ちにこれを宇宙の活動と謂はん—若し猶ほ進んで其深奥の玄理を探らんと欲せば何人と雖も彼れ一青年の如く不可解と叫ぶの外なかるべし。

されど今、予をして其不可解の活動に就て少しく述べしめよ、

抑も變化—活動なるものには其過程の状態に就て云はゞ必ず三種の意味を有するものなるを知る、曰く、進歩、退歩及び無意義の轉化これなり。

滔々と流るゝ水には奈何の意味ある、若しそをして水車を廻轉せしめ、舟を奔らしめ、灌漑に供せしむる時は、即ち彼等の流は有意義の活動をなしたるもの、換言せば其流は進歩せる夫れなるべし。凡そ進歩、退歩の二状態は必ず一定の目的のありて存するもの、無意義の轉化に至りてはたゞこれ器械的のみ。茲に於て乎、活動は別れて二種となる、蓋し、目的論と器械論との存する所以也。

果して然らば宇宙万象の活動は如何、地球は二十四時にして一回轉し、十二ヶ月にて軌道を一周す、四季別ありて、過去 未來永久に變ることなく、無際の天空、無限の星斗、たゞこれ一幅の畫圖、然も彼等は各々自由に活動す、其終局は奈何。彼等の活動なるものゝ結果に就ては今日迄の睿智によりては到底これを憶測すること能はざるべし、唯曰く、不可思議これのみ、然り予は謂はん、たゞこれ無意義の活動のみと。

無意義の活動、この大なる宇宙、無始無終限の渾沌たる宇宙の大渦卷、あゝたゞこれ無意義、空行く雲、地を拂ふ風、大海の濤、溪間の流、植物の生枯、動物の喧騒、數へ來らば大にしては天体の運行、小にしては地上の一塵、これ等の活動は皆これ無意義なる活動（吾人の眼に映じ得る限りに於て）の顯現也。

自然万有の變化は皆之れ同一活動の顯現、たとひ、現象に於て千差万別なると雖も、其根源の力は

些の偏頗あるなく誠にこれ絶對無限完全無缺の力なる也。

予は猶ほ進んで此事に就て論じ度きもこは全く自然哲學の範圍に屬するものにて、予か述べんとする論旨以外に亘るの恐れあれば、遺憾なからこれのみにて筆を止め更に他の方面に向はんと欲す。

予は既に自然の力は絶對無限完全無缺なるを謂へり。然らば茲に翻て人類の活動如何を論せん、人類の活動も勿論宇宙活動の顯現なれば従つて無意義の轉化なるべきや。

夫れ人類渾球上に顯れ出でしあり茲に二千萬年、其間彼等か殘し來れる歴史は果して如何なるものを吾人に知らしめたる乎。先づこれをアダム、イブの時代に見よ、彼等は神の形に造られ、神の保護によりてエデンの園生に棲息したりと云ふ、彼等は智慧の樹の實を味ふ迄は全く智識を有せざりし也。其間の彼等は全く土人形と一般なりしが一朝毒蛇の誘惑にあひ、欺かれて神の禁せる木の實を喰ひ、こゝに初めて彼等が胸に罪惡の種子を蒔きぬと云ふ。此間の消息のうちに吾人は何を見出し得るや。今日の科學的頭腦より見れば其荒誕無稽笑ふに堪えたるものなり。されど其内面に蟠れる一眞理を見出し得ば即ち吾人は或物を了解するを得ん。人類の初期は意味の蠻人、下等動物と擇ばざるもの、其生活は原生動物の夫の如く、専ら自然の惠露に支へられたるもの、されど終に自然の惠其物の彼等か需要に不足を感せしむるの時來りて、彼等は同類の數を削減して以て自からの供給の豊ならしめんを計り、戰は生じ、殺戮は起り、強者はつひに弱者を滅ぼし、こゝに彼等は戰鬪の趣味を解するに至り、優勝劣敗、弱肉強食の眞理は行はるゝに至りたるもの

の如し。

既に人類は其か活動の方面に一点進化の大法を顯し來りぬ、これより歳と共に代と共に、幾千年の間諸有活動は起り來り、社會的關係は自然に顯れ、一團の知より、協同生活の便を味ひ、國家社會の形成を見るに至りたるなり。

既に箇々の國家の成立あれば戰鬪は其間に絶えず、所謂平和は戰鬪より戰鬪に移るの準備なるものとなれり、若し夫れ戰鬪の休止に至つては腕力の争鬪の潜影にして箇人的軋轢は猶ほ甚だしく、従つて平和時代には個人的悲劇の最も多き現象を生し、こゝに人類の平和は武裝的平和となりたるに至る、これより一步進めば、腕力の平均より、つひに精神的優劣に歸する貴賤懸隔を生ず、されどこれ猶ほ忍ぶべくも、彼の個人的競争の結果たる階級的競争に至りては實に悲慘の極、痛恨に堪えざるものなり。而してこの階級的競争は生存競争をいよく益々激甚ならしむるに至りしなり。

嗚呼吾人はこゝに至りて轉て人類の活動なるものに就ては、涙なき能はず、彼等は遂に自然淘汰と適者生存との理によりて生存競争の一大戰鬪を惹起し來り其窮終する所を知らざるに至りぬ。

勿論、一面には宗教は起り、哲學は起り、あらゆる精神上の發展を見るに至りたりとするも、これ等は即ち生存競争の反動として必然起るべきの現象なり。軀は疲弊困憊して、煩悶また煩悶を重ねたる人類はつひに基督を生み、釋迦を出し、孔子を顯はさざるを得ざるに至りたる也。

果たして然らば、人類の最後の理想は、つひに、この競争なるものか、適者生存の眞意か。而し

て宗教なるものは人類本來の性情に基くものに非ずして第三者として輸入し來れるものか。否非す。これ餘りに早計に失したる見解のみ。

若し夫れ競争が眞の理想なりとせば、我か親或は子か自己の勝利を妨害したらんに我果して親を打倒すべきか、または子のまさに井に投せんとする時も我よくこれを看過し得べきか。否、然らざるべし、縦令ひ、競争に如何なる關係ありとするも、其か一切の事情を問はず、我には其隣人に對して我か血屬を保護せんとする情はあり、他村に對しては我か村落を愛護する情自然と起り、外國に對しては、母國を思ふの念起らざるを得ざるべし。我子の利害に關しては我を忘れて保護するの情起るを知らば、我なるものは、つひに競争なる觀念の以外更に高尚なる愛なるものありて存するを認むべき也。

愛、愛は生物固有の心作用、又は利己的本能の變形物なりやは猶ほ疑問として存することゝす。さりながら生物にして愛なき生物よしありとするも、人類にしては、これを欠けるもの殆んどなかるべし、従つて愛は人心に固有なるものと見做すを得べきなり。而して愛の發展は原始は勿論異性愛たる動物的本能に發源したるものなるも、人類に至りてはつひに道德的價值を有する眞正の愛情の連々として迸出するものあるを知るべし。

扱てこゝに一步を進め、この眞聖なる愛は如何に顯はれ來れるかを見んに、先づ其人類活動の上^に顯現せる極初は、吾人之を母子の間に於て見る也。母が其子を愛するの情は實に聖の聖なるものにして、其間には瑣の利己的感情なく、母の身は直ちに子の體にして、子の苦悶は即ち母の苦

悶、猶ほ切言すれば母は即ち愛の犠牲にして渾身の血皆これ子を思ふの情に満ちたるもの。あゝ斯くも清き聖なる愛はまた渾球上何處に求め得らるべきか。母の愛は子に及び、同一の愛泉に浴したる子供等は互に母の聖なる愛を感得して、こゝに兄弟間の愛情は成立し、續て朋友間の友愛となり、長者に對する敬慕の念、恩人に對する報恩の情を起し來り、これを大にしては終に人類一般の博愛となるに至る也。然らば博愛の現象は夫れはた如何の經路を辿りて現れたるか。人類の出現以來幾千萬の星霜を閲し、其間所謂愛なるものは幾多の發達を經過し來りて、爾來母子の聖なる愛を味ひ居たる人類のうち雄偉莊嚴なる愛の代表者を生ぜしむるに至りたるなり、即ち聖者これ也。

聖者の愛は眞に神聖なるものにして、彼等の眼中に映じたる人類は皆これ同胞たるなり、而して其温懷より迸發する愛情は不偏にして完全也。若し夫れ彼等が行爲に關しては客觀的認識に由りて時に或は一二の批難をなすべきものあるも、其主觀的動機を觀察しなば其の胸より溢るゝ至誠は完全無缺絶對無限のものと云はざるべからず。此種の愛は終に其形式を變じて一種道德的の意味を有し來ると共に、宗教の根源を基礎づけ、茲に不動の勢力と犯すべからざる神聖の威を放ち來り、以て彼等が理想實現の方法と成れるなるべし。

基督が温き血を十字架上の流したるは、其れに由て禍なる人類の罪を贖ひ以て彼等を永遠に救はんとの高遠無限の愛より出でたるものにして、應て人類同胞の觀念より抽出せるの結果也。佛陀幾十年の難行苦行を積んで惑むべき人類を肉躰の痛苦より解脱せしめんとせる献身的の行爲は、

實に彼が胸中慈悲愛憐の情を漲溢して抑ゆべからざるものあつて存せるに由れるものと云ふべき也。またこれを小聖的人格のものに見よ彼の志士仁人、忠臣義士の如きは皆これ人間共通の愛を具体的に發展したるものと云うて可也。

即ち予は母子の愛と聖者の愛とは其勢力を及ぼす範圍の大小あるに由て異なるのみにして其内容に至つては全く同一物の發展に歸すべきものなることを斷言するもの也。

茲に於てか、吾人は所謂人類の活動なるものが如何なる經路を辿りて發展し來れるかを見るを得たり。即ち、一は競争にして一は愛也。この人類進化の二大要素、これに吾人は道德的名稱を附せんと欲せば、競争は即ち惡にして愛は即ち善也。愛と競争と、善と惡と、これ果たして異物か。

蓋しこれ古來幾多の聖賢哲士が頭腦を悩ましたる大問題にして、彼等各々自己の見地に據りて其が解釋を試みたるか故に時に或は矛盾の解決を與へたるものすらあるなり。ライブニッツの如きは消極的の解釋を下して惡とは即ち善の欠缺なり従つて宇宙の根本善なるを唱へ又ショーヘハウエル氏の如く宇宙の根本惡なるを説て絶望の境に陥れるものありき。

遮莫、予輩に於ては到底哲學的、倫理的の解釋を下さんとするが如きは得て望むべからざること屬す。若し夫れ、強て予に言を爲さしむれば、予は人類社會に於ける過去現在の出來事に徴し深く人間行動の微衷を觀察考量することに由りて次の如き斷案を下すまた必ずしも難からざることす。

競争は同類意識の發達不完全なるに因するものなり。

生存競争と云はず將たまた奈何の惡的行爲に於ても、其主なる動機は「隣人を捉へて汝我を殺すか然らずんば我汝を殺さん」底の一種殘忍刻薄なる思想を有せるに歸因せざんば非ず。

同時に吾人は再び次の斷定を下すに踟躕せず

愛は同類意識の完全に發達したる境涯に於て初めて萌芽するもの也。

母の愛か子に最も強きは子は我が分身なりとの意識の最も確實なるものあるが故にして、これか歳星霜を経るに従つてつひに人類の本能性となりしなり。兄弟の愛、朋友の友情、これ等は凡て自己の精神と彼の精神との間に一種の圓融默會の成立するものありてこゝに同類意識の比較的完全に發達し來れるを示す也。聖者の愛に至つては此の意識の發達は最も廣く最も完全に些の間然する所なく、凡て世界の人類は皆我子也共に同胞也との、宏大無遍の大精神より湧出したるものとなす也。

是によりて之を觀れば、人類進化の二大要素は其根源に於て共に一に歸着するものにして、ライブニッツ氏の言の如きをなし得べき也、

競争とは愛なる觀念の不完全なる發達の狀態の謂にして、従つて惡は善の欠缺也。

凡そ物に表あれば従つて裏あるは理の當然にして、其物全体は表裏融合の結果を示すものとす。裏は直ちに表也、何すれど、殊更に區劃して相異れりとなすの愚を致さんや。

競争の現象は愛なる力の顯現即ち表面にして臆てこれ愛なる理想實現の手段たるのみ、切言すれば惡や即ち善的理想發現の忠僕たらん也。

茲に於て乎、知らん、人類万般の活動は皆これ一大精神に愛なる力の顯現にして、而して宇宙の活動と吾人の所謂愛なる力とは同一物たるや明けし。

宇宙の活動が主觀客觀を超越したる實在なる第三者の活動にして、無差別平等なる一如の觀念に歸着するとの哲學的解釋は予のこゝに喋々する所に非ず。兎に角、吾人は宇宙の活動なるものは人智的解釋の下には終に愛なる大精神の活動と一致すること、聽てはこれ人生終局の最大主義なることを會得するを得ば以て足れりとす。

三

讀者諸君、予は前二段に於て宇宙の活動即宇宙の大精神が、即ち人類の立場に於て見たる大なる愛の精神なることに説き及ぼしたり、茲に於て乎、愈々本題の主眼たる予の所謂神秘なるものに踏み入りて大体の解釋を下さんと欲す。

抑々神秘とは如何なるものか、吾人の解釋は即ち左の三方面にありて存する也、而もこれ予が理會の程度に於て一切と認めたるもの也。

- 一、科學的(現象的)方面—吾人が宇宙万象に對し其の變幻極まりなきが中に於て、凡そ幽暗不明、到底科學的智腦に由りて解すべからざるものにして而も獨り感じ得るもの。
- 二、宗教的(靈的)方面—吾人の靈性上に一種神的光線の反照として印象するもの。
- 三、哲學的方面—諸有ゆる事物現象に對して其か内的關係の研究に由りて苟も初造元行の者と認めらるゝ者を稱して神秘と謂ふ。

而して以上は勿論其方面を異にすと雖ども皆ともに同一物の解釋たるべきは明也。

譬へば、未開の蠻人が宇宙微妙の感に打たれて、たゞこれ不可思議なるものよと認めたるものも、普通吾人が宗教的信仰の眼光を以てこれ神の光よと觀じたるものも、古今の大哲學者が宇宙の何たるを研究し其か活動の根本真理、將た其の本體なるもの、如何なるものなるかを認めたるものも、凡てこれ皆同一物の觀察の異方面よりなされたるは苟も一般の智識を備ふる者の直ちに了解する所なるべし。

遮莫、現象にのみ拘泥する科學的方面の解釋は如何なる人も皆認めて以て單に其物として放置するに止まるのみならんも、其以上に探究して以て深奥の理法を會得するを爲すには智能其餘りに鈍なるを知るを以て、茲に於て予が探るべき唯一の途は第二の宗教的方面の解釋に於て止まらんのみ。

是を以て蓋し、予が所謂神秘主義なるものは其根底をまさしくこの第二方面の解釋上に据ねたる者となすべき也。故に其主義として固守すべき理法としては無く、要する所、この宇宙界に於て自からの靈性に感得せる信仰上の生産物たるに過ぎざるのみ、されば決して其以上の幽微深奥の理論的哲學的抽象的の夫れには非ず、

猶は切言すれば予が神秘主義を解釋せんとせば直ちに第一、第二の二方面の解釋の渾然融合せるものと謂ふも不可なき也。乞ふ左に少しく其主義の内容を明かにせん。

夫れ凡そ神秘なるものは自然界に於てよりも寧ろ却て人類其物の中に將たまた人類と自然との相

對的關係の中に於てのみ含蓄せらるゝもの也。

白雲行流水、高嶺深谷、蒼海曠野、あらゆる天の莊嚴地の美麗、切言せば宇宙の事物現象は悉くこれを神秘的に觀するを得べき也、而も是れ尙ほ自然的也。風は吹き雲は飛び雨は降り水は流る是等は單に自然論の範圍たらんのみ。然れども若し吾人かこれ等の現象事物に對して起されたる感想を解釋せんとして其現象か何故に起りたるやと問ふことあるに至らば全くこれ神秘論に屬すべき也。

猶ほまた見よ、石、人の頭上に落ちて其人死す、この斷定迄は全く自然論也。されど一步を進めて、何故に石は爾かく此人の上に落ちしやと問はゞ是既に神秘論たるを免れじ、而してまた石に傷けられたるは素より神秘ならざるも其れに由て生じ來れる死は全く神秘也。蓋し死は事實としての神秘なり、是れ即ち第一方面の解釋に屬す。

翻て、これを人生の運命に見よ、人の運命は刹那として、または人類の犯せる罪惡の必然的罰(因果的關係)としての神秘と觀すべき也、これ即ち第二方面の解釋也。

こゝに於てこれを見れば、自然論と神秘論との差異は其か吾人の心的生活に對して主觀的動機を惹起せしむると否とにありて存す。

是を以て吾人の靈的活動の伴はざるに於ては到底神秘論の成立を見ること難かるべきは論を俟たず。

吾人若し眼を閉ぢ、耳を蔽ひ、我身と外界との一切の關係を絶ちたらんには、其か感想果たして

如何、曰く空！

即ち吾人か精神の發展は一に全く外界の現象に歸因し、やがて思想感情は自然万有の表象と密接の關係を保持すと謂つべき也。これを換言せば即ち前段に述べたる如く、人類の靈性發展は宇宙精神の顯現にして聽て其か生命は自然界に於ける万有の神秘的對象なり。これ即ち予が神秘は自然と人類との相對的關係中に含蓄せらるゝもの也と謂ひし所以也。

次にこれを人類相互の間に於て觀察せんに、例ば茲に或る人ありとす、今第二者によりて強く其手掌を壓せられたりとせよ、若し此の状態を第三者のあるありて傍觀したらんには唯二人の掌とは其壓迫によりて相互に感得する或者の存在を認知するを得べし、相互の壓力は筋覺によりて、これを感じると雖ども其以外の力即ち冷たき或は温かき或る一種の力の流は彼れより此に流傳するを覺ゆるなり。此の心的冷熱の力流は聽てこれ彼か心情の代表者たるものにして吾人はこれによりて直ちに其温情の士か將た冷刻の質か、兎に角彼か情狀の一般を斷定するに難からざるべし。若しや、吾人、此現象に對して科學的の解釋のみに拘泥するあらば争か、其彼と此との交通せる心情の流を認め得べきか。

夫然り、然らば、吾人が一事一物によりて直ちに感得したる種々なる想念は直ちにこれかの一事一物と我との間に行はれたる神精交通の結果に基くものなるを知るべき也。

聖書を読み經を誦して忽然として悟徹の境に入るの時は、即ち基督、釋迦の精神と我が精神とは

こゝに交通の途を啓き俱に默契の機を得たるの時也。悲痛の談を聴きては俱に涕泣し、慘憺たる景に接しては惻々の念に悶ゆる、これ等は皆其対象と吾人との間に於ける精神の交通（精神といひて語弊あらば予は或る力の流と云ふに躊躇せず）に由りて起れる所謂神秘なり。或は吾人か若し亡き知人の小照に對するの時あらば、その瞬時吾人の脳裡には其亡き人に關する過去の出來事が簇然として想ひ浮び、併せて其人を思ふの情、痛痕、懷慕、悲愁、無限の感慨に満たさるゝに至るべし。這般の現象に對し吾人は到底心理學の所謂、心的作用、觀念聯合、聯想作用等の如き解釋にては首肯すること能はざる也。猶此外吾人は神秘感得の瑣々たる現象を枚擧するに至らばこれ日も足らざるべし。蓋し人事一切は皆悉くこれ神秘現象なれば也。これ蓋し、予は曩に神秘は自然より寧ろ人類の中に含まれ且つ凡て主觀動機なりと謂ひし所以也。

而して、人類中に於ける神秘感得の比較的向上せる且つ莊嚴偉大の現象を呈するものは吾人これを天才者に於て認む。

世の人時に天才者を目して狂者と同一視する者往々にしてこれあり、然れどもこれ甚だ輕薄なる早計の言柄のみ、蓋し兩者の異点は一言以てこれを蔽へは、天才は先天的のものにして、狂者は後天的現象也となす。徒らに外見の狀態時に相類似するあるを以て直ちに混淆して論ずるを止めよ。天才者の心情は天才者に非らずんば解すべからざる所、到底凡骨の識知察了する能はざるものとす。彼等が頭腦より湧進する情は生々潑地沸々炎々、恰も大なる力の假りに彼等の心に宿るありて以て活動せしむるが如し。然り天才の心情や、平常人の如くなるも一旦宇宙神秘を感得す

るあるや、雄渾なる勢力は其思想を煥發して即時にこれを發揮するの能力を有せるもの也。甚だしきに至つては神の聲を聴き或は亡者の靈と會話するあるに至るあり、これ等は神秘感得の一層敏活に一層峻刻に其胸中に徹貫印象せるものと謂ふべき也。這般の境遇にあつては天才者は全く普通人類の夫れならで渾身皆これ宇宙神秘の權化なる也。

猶言を切にして云へは、神秘は吾人自身、相互間及び吾人と宇宙との靈的交通融合に基礎を有するものと云ふべし。更に猶一步を進めて論究すれば、吾人人類間に含蓄せらるゝ神秘は纏てこれ宇宙と吾人との間に起れる神秘と同一徹たるべし、そは客觀的人類の精神活動は直ちにこれ廣義の宇宙精神の顯現なれば也（既に前段に於て論じたり）。故に、茲に最後の斷案を下せば、

神秘は吾人と宇宙との精神交通によりて起るもの也。

然るに予は已に、宇宙の精神は大なる愛の方の權化なることを謂へり。故に予は進んで猶ほ左の斷定を下さんと欲す。

凡そ吾人の神秘感得は直ちにこれ宇宙の大なる愛の方に接觸感應し、融會默契するの意也、而してこれ皆予が信仰によりて生れたる解釋にして已に前に述べたることと、神秘解釋の第二方面を根底したるもの也、故にこれまた、予か眼に映じたる宇宙神秘にして纏て人生の最終の最大主義、予か宗教の一切と思惟するものとす。

而して今や予か筆を擱くの時に至りぬ、顧みて轉た慚汗の背に滴るを覺ゆ、予か徒らに瑣々たる

現象を捉へて以て爾かく深奥なる神妙の理法を解釋せんとしたるは豈夫れ大膽の行爲に非ずや。然りと雖もこれ元より予か神秘主義即ち予か信仰より産したる神秘主義なれば、決して理其正を行けりとは謂はず、予は唯己が神秘に關する研究の一端を諸君に紹介するを以て満足する者也。若し夫れ第三方面の解釋に至つては今後多年の研究を待つて再び諸君に見ゆるの榮あらんを信す。菲才を顧みず、茲に貴き紙上を汚したるの罪は深く謝す所、讀者諸君幸に諒焉。(四月十一日夜脱稿)

積土成山、

風雨興焉、

積水成淵、

蛟龍生焉、(荀子)

 雜 錄

英國貨幣に就て

浦 井 恒 堂

今度デハビランド教師より参考のため英國貨幣を本校に寄贈せられ圖書室に備へ付けられたるに付看る人の便のため聊か解説を試みむとす

英國の通貨は金銀銅貨(皆造幣局 Royal mint の鑄造に限る)と銀行紙幣(Bank note)との二種なり而して銀銅貨は補助貨とす

金貨は一ソベレン(Sovereign)と半ソベレンとの二種ありソベレンは或はポンド(磅)といひ又ステルリング(Sterling)ともいふソベレンは君主の意にして貨幣の表に當時の國王又は女王の半身ハーフを鑄出しあるを以てなり俗言にては此貨幣を單にソブと云ふステルリングは第十一世紀に於て鑄造せられたる英國最舊の銀貨の裏面に星の紋章ありしより起りたる稱なり一ソベレンは二十シリングとす官吏傭人の俸給醫師辯護人の報酬など所謂プロフェツションに關する時其他贖金義捐金書籍の代價などにはソベレン又は磅の稱を用ひずしてGuineaを用ふる慣習なりギネは二十一志の價にして十七世紀の中葉查理二世の時より一八一六年まで行はれたる貨幣にして今は既に無しと雖も猶其名盛に用ひらるギネには五ギネ二ギネ半ギネ四分一ギネの各種ありて最初アフリカのグイ

ヤナ (Giniana) 地方より輸入せる金塊を以て鑄造したるに因りて起れる稱なり磅の略符は £ にして是は拉丁の貨幣 Libra の頭字なり

銀貨は一志二志 (一名 Floren) 半クラオン (Half crown) 四志及クラオン (五志六ペンヌ四ペンヌ三ペンヌの各種ありフロリンは十二世紀に於てイタリアのフィレンツェにて鑄造せる貨幣に百合花の模様ありしより拉丁語の花 (Floren) より Floren と訛傳し廣く歐洲に流通せしより出づ英國にてはエドワード三世 (十四世紀の中葉) フローリンを作り六志の價を定めたるが直に廢せらる現行のは一八四九年より始まりプロリンと半クラオン貨とは形狀酷似せるがため外國人などは受授の際屢々誤るといふクラオンは其裏面に王冠若くは王冠を戴ける君主の頭を有するより名く一五五一年エドワード六世以降行はる銀貨は補助貨なるを以て二磅以上は受取ることを拒むを得志の略符は S にして亦た拉丁貨幣 Solidus の頭字なり

銅貨は一ペニー半ペニー及 Farthing の三種あり一ペニーは四ファージングとすファージング貨は恰も我邦の一厘銅貨の如く見ることを稀なりといふ銅貨は俗語にて Copper と呼ぶ一志以上の銅貨は受取ることを拒むを得 Penny の略符は d にして拉丁貨幣 Denarius の頭字なり英人の諺に曰く

Who can't keep a penny,

Will never have money.

倫動を始め大都會に於ては佛蘭西以太利の銅貨は英貨を混して差支なく流通すといふ

銀行紙幣は主として Bank of England より發行す最低は五磅にして俗に之を a five といふ最高を一

千磅とす

英國の貨幣制度は中世紀に於て北歐の商權を掌握せるフランドル (Flanders) の制度を其まゝに傳へたる者にしてフランドルに於ては一ポンドは二十シルリング一志は十二グロート (Groats) なりき獨のグロッシェンも亦た此グロートより出たる者なり、

聖アウグスチヌス (續)

森 内 政 昌

かゝる血あり涙ある「人の子」アウグスチヌスは、常に苦惱の中に煩悶しつゝあつたのである、渠は人間の有する凡ての罪惡を所有して居つたのである、渠が罪惡の罪惡たる所以を知り而かもその罪惡に同情を有して居つたといふ事は、即ち渠の苦惱の原因である、此苦惱を離脱して神に息はんが爲めに、渠は先づ智識にその嚮導者を求めたのである、而かも智識の究竟の安心を與ふるに不可能にして、反へりて疑惑を増すの具たることを渠は未だ悟らなかつたダンテは地獄の嚮導者をギリギリウスとなし天國の嚮導者をベアトリチェとなした、ギリギリウスは智識を表はしたもので、ベアトリチェは愛を表はしたものである、まこと天國の門戸は決して智識により開かれ得るものではない、智識は此世界の事象を説明し、吾人をして此世界に生存せしむるに必要な武器を與ふるものであらふけれども、天國の門戸を開くべき鍵鑰は「情」に於て求むべきものである、アウグスチヌスは未だ此理を解するに至らなかつた、多くの青年は一切の事象は智識によりて解

釋せられ得るもので天國の秘密も智識によりて開かれ得るものと考へる、アウグスチヌスも始めはしかく思惟したのである、渠はアリストトレイスを研究し、マニヘイズムスの教理を闡尋した、而かも渠の所謂眞理は見出され得なかつた、「眞理は全く見出され得べからざるが如く見ゆ」とは渠が當時の述懐である、渠は竟に懷疑に陥り新アカデミケル一輩の説を信奉するに至つた、嗚呼懷疑！渠は遂に懷疑の捕虜となり了つたのである、

かくて一時懷疑の迷霧中に彷徨したりし渠は、再び懷疑の迷霧を打破して天日の光明に接するの機會に逢着したのである、渠はマイランドに高僧アンブロウジウスと相見るに及んで、渠の胸中に蹣跚せし疑惑は既に消散し、安心の曙光は漸く渠の胸臆を照らすに至つたのである、渠は智識以外に眞の光明を興ふべきある物の存在を知り始めたのである、始めアウグスチヌスのカルタアゴにありて、到底道の得て求むべからざるを知るや、當時の世界の都府たる羅馬に赴かんと希望は、油然として渠の胸裏を満たした、渠は遂に地中海を横りて羅馬に航すべく決心した、母モニカは之を聞いていたく啼泣しその旅行を思止せしめんと努めた、蓋しカルタアゴにありて無頼檢束し難かりし渠は、羅馬に往いて如何なる悪生涯を終るに至るべきかの疑問は、痛く老母の腸を斷つものあつたからである、渠は遂に母を欺きて逃走した、紀元三八四年羅馬よりマイランドに移り、能辯術の教師として生活するの日、渠はアンブロウジウスを識るを得たのである、「神よ予は自から知らずして、神の御手に導かれ、遂に渠を識るに至りぬ、予の渠を愛せしは、その眞理の教師たるに非ずして、親しむべき人たるに在りき」と、此語は如何に渠がアンブロウ

ジウスの人物に感化さるゝ所ありしやを表白するのである、當時渠は更にボウロの消息を讀みて、益々キリストの神たることを悟つたのである、渠は今や基督教の安心を擧得すべき道程に上つたのである、渠は遂に洗禮を受けんと決心した然れども渠の此決心を實行するに躊躇する一原因は存在して居る、他なし當時基督教の洗禮を受けて、誠意神の道に入らんとするの人は、先づその慾を斷つべきである、隱者的の生活はかゝる人の缺くべからざる必要條件である、然るにアウグスチヌスはかゝる隱逃的滅欲に適せる人であるか、渠は浮世的 貪名心を有すると同時に、肉の抑ふべからざる慾望を有せる人である、渠のかゝる向上的の決心は先づその肉に打ち勝つた後でなければならぬ、慾望の要求を拒否するの勇氣と忍耐とを得た後でなければならぬ、渠は是に於てか心の苦惱を感化せざるを得なかつた、恰も好し此時に當りてアフリカより渠を尋ねてマイランドに來れる知己が一夕の談話は、渠に此決心を斷するの勇氣を興ふるに至つた、客は聖アントニウスの言行を物語つて、かゝる聖者の言行の如何に青年に及ぼす感化の大なるかを證するが爲めに、二人の青年のアントニウスの生活に感じて、突然世を捨て隱者となつたと云ふ事實を以てした、渠は痛く此一夕の談話に感じて遂に洗禮を受くるの決心を固めた、渠は三八七年の復活祭の日アンブロウジウスによりて洗禮を受くるに至つた、渠の一子アデオダスその友アリユウピウスも同じく基督教徒となつたのである、

是より先き母モニカはその子を氣配ふてイタリヤに來り、アイランドに居住して居つたのであるが、アウグスチヌスは既に基督教の洗禮を受け免にも角にも生涯の一段落を付けたのであるし、

老母の故郷を偲ふの情をも思ひ遣りて一先づアフリカに歸らうと決心した、渠等は羅馬を出立しオスチアに着せし時、モニカは熱病にかゝつた、渠女は己に死を豫期して居つたのである、乃ちアウグスチヌスを傍近く呼んで、「汝は予に此世にありて以上の喜びをなすを要せじ、今や予の目的は達せられたる今日、如何んぞ永く此世に止まるを要せんや、唯一つの希望は予をして今日迄生存せしめぬ、他なし善良なる基督教徒として汝を見んとせしこと是なり、而も神は予に此願を充たしぬ、尙ほ生存らへて何かはせん」と告げた、此語の如何に深き母の愛、如何に尊き母の慈悲を表はして居るかは、一見して明かである、アウグスチヌスは之に對する答へを知らなかつたのである、モニカは語を繼げてアウグスチヌスとその兄弟に向ひ、「汝等は汝等の母を此地に葬るべし」と云ふたアウグスチヌスはたゞ無言である、その兄弟は母に向つてかゝる異郷に客死せんよりはアフリカに販るまで病の癒へんことを祈るの意味を以てした、莊嚴にして且つ敬虔なる母は渠に向ふて口を開いた、「母の屍を何れの地に葬らんも可なり矣、たゞ汝等に願ふ一事は、汝等何れの地にありても神の祭壇の前に汝等の母を記憶せんこと是なり、何物も神より遠かれるものはなし、予の屍は何地に横はることも、予は神の最終の日に發見し給ふことを疑はず」と、その死に類して尙如何に心の餘裕と襟度の活恬とか安心の光明を表はしつゝあるか、明かである、

母モコカの死のアウグスチヌスの生涯に深き印象を與へたことは疑ふべき限りでない「渠は以後の生活をして如何にもして母の遺思に副はしめんと考へたのである、渠は三八八年アフリカに販り父の遺業たる田舎の別荘に隱遁し、祈禱と精進との間に聖書の研究に耽つた、「精神の偉大につ

き」自由意志につき「世界創造に關する二書」眞の宗教等の著作は當時の渠が沈思默想の結果である、然しアウグスチヌスは永く隱遁的生活に耽ることを許されなかつた、渠は宗教の社會的作業に參與して、大に宗教の面目を刷新すべき腕を有せし人である、世人は夙に渠の敬信家たる而已ならず、又偉大の人物なることを觀破したのである、かゝる人物は永く世界以外に蟄居することを許さるものではない、果然ヒツポウ、レギウスの皇帝の代官は渠をその地に喚ひ、ワシリウス僧正の懇情は遂に渠をしてヒツポウ、レギウスの會堂長として働くことを承諾せしめたのである、然し渠がその劇務の餘暇に靜謐なる時間を沈思熟考に費し得んが爲めに、美麗なる庭園と瀟灑なる臺榭とは渠に寄せられた、此庭園と此臺榭とは渠の出世間の生活の爲めに設けられたるものである、渠の友エロウデウス、アリユウピウス、ポシデウス、スカアルス等も亦渠に従ふて移つたのである、三九五年ワレリウス死しアウグスチヌスは乃ちヒツポウ、レギウスの僧正となつた僧正として、渠の生活は至つて簡單なものであつた、渠は酒の數杯を辭せなかつたけれども、皿に肉あることは甚だ罕であつた、渠の家には全く婦人の同居を許さなかつた、血族のものも滞在を拒絶された、渠は常に自己の「乞食の乞食」たる根本的主義によりて、貧しきものに同情を有したのである、渠はかくしてヒツポウ、レギウスの名譽ある僧正として、清淨なる生活の經路を辿りつゝ、尙ほ常に心の苦悶を有しつゝあつたのである、渠は眞の基督教徒はその生活の間には平安よりも苦惱を有するものと思つた、蓋し此世界は天國に至るべき巡禮者の途にして天國そのものではない、此の短かき現世の生活は畢竟するに苦であると觀じたのである、夫故に渠の後半

生は年を経るに従ふて陰鬱の度を増して來たのである、渠は決して此世に於て光明の全き形を攫得し能ふべしとは少しも考へなかつた、眞の光明は決して此世のものではないと云ふのである、アウグスチヌスの晩年は外界の不幸によりて渠の心身を苦しむる事件を喚ひ起した、他なし、ワンドル族の闖入である、猛き北方の強ともいふべきズンドル族は、始めはポニファチウスによりて援助の爲めに呼ばれしも、遂には國を破壊するの具となつた、ヒツポレンギウスも亦此災禍を免れなかつた、渠は市街の敵より救ひ出されんことを願ふた、渠は失望の餘り自己の此世より救ひ出されんことを願ふに至つた、「予は神の來りて予の前に現はるゝまでは涕泣を止めざるべし、此涙は予には最上の食料なり」との語は如何に渠の心情の切なるものありしやを想像するに餘りがある、渠の願は遂に聽かれた、渠は紀元四三〇年八月七十六歳を以てヒツポウレギウスの地に死した、僧正の職に在ること實に三十五年の久しきに彌つたのである、

アウグスチヌスの宗教は、絶對的信賴の宗教である、全く他力の安心である、弱き人間は神に賴り神を信じて、少しも自我の觀念を加へない点に安心を見出すべきである、人間の自力の作業によりて禍福を左右し得べしと考ふるのは、尙我執の痕迹を全く離脱するに至らないのである、此点に於てアウグスチヌスはペラギウスとその宗教觀を異にしたペラギウスの説によると、人間はもと罪を有するが如きものではない、アダムの遺傳罪が子孫を累はすといふ謂れはない、吾人は徳なく生れたと同じく罪なく生れたのである、神の恩寵はアウグスチヌスの云ふが如く絶對のものではない、吾人は吾人の善行により天福を受くべく、又吾人の罪惡によりて苦痛を受くべきで

ある、如何にしてか吾人は解脱すべき、他なしキリストの如く作業すべきである、キリストは吾人の模範である、吾人もしキリストの迹を逐ふて善を積まば、天國は即其處に存するのである、此ペラギウスの説は自力説である、自力は尙自我の執着を示すものである、尙世界的差引的の趣味を脱しないものである、尙倫理に拘泥して倫理を超絶するに至らぬのである、倫理は自己の所業の善惡によりて淘汰せらるゝものなることを教ゆる、かゝる思想は世界的である、ペラギウスの宗教觀は未だかゝる倫理を超絶しないのである、宗教の妙味は超倫理の境にあるのである、よく人生を考一考し來れば中々に倫理の教ふるが如くに簡單に人生を裁判し得るものであらふか、倫理は花咲き實を結ぶ樹木は之を培養すべく、花咲かず實結ばざる樹木は之を伐つて薪とすべく教ふる、然しながら花咲く樹花咲かざる樹かゝる差引は如何なる無邊の神慮より來つて居るのか、中々に測り知るべからざるものであらふ、夫故に眞の大宗敎家の深く世界の眞相を考ふる人は、社會の出來事に與ふべき判斷を知らぬのである、たゞ吾人は社會の現象を見、神意の不可測なる處に神の莊嚴を認めて、たゞ神に任かすより外はない、なまじい人力を以て事を左右せんとするのは、その人間の着眼が未だ社會を出ない證據ではあるまいか、吾人は此に於て乎、益々アウグスチヌスの偉大を感ずるの外はないのである、ペラギウスとアウグスチヌスの對比は猶ツキングリとルウテルの對比に相似たるものがある、ツキングリは嚴格なる道德の實行を以て彼岸に達しようど勉めるのである、云はゞ偏狹である、窮屈である、ルウテルの救ひは之に反して樂しきゆつたりとした救ひである、ルウテルはツキングリの如くに救ひを以て敢て力行の結果とは考

へない、現在の状態は既に到る處に神の聲を聴き得る状態であると考へるのである、夫故に現在の状態に對して不平を感じることはツキンググリの如く甚しくない、夫故に吾人はツキンググリのベラキウスの性格の中には、未だ息はない、窮屈な、骨の折れるといふやうな感を起さざるを得ないけれども、ルウテル、アウグスチヌスの性格の中には、息へる、楽しい、餘裕ある点を發見し得るのであります

かゝるアウグスチヌスの他力的安心は、遂に羅馬の教會をして益々その光輝と威權を増大せしめたのである、アウグスチヌスは前にも述へし如くに、救ひは全く神の恩寵に依るものとした、夫故に吾人は全然我意を滅して神に頼るのである、即ち信仰は吾人の救はるゝ唯一の關門である、ポウロはキリストに信頼すべしと教へたけれども、アウグスチヌスは教會に信頼すべしと教へた、吾人は救ひの可見の團體なる教會を絶対に信すべきである、不可見的の神なるキリストを信するなど、考ふるのは弱き罪ある吾人には高慢なる潜越なる考へである、吾人はひとへに吾人の手近に存在せる教會の媒介によりて神と交通し、その媒介によりて救はるべきである、吾人は教會を信するの外に道はないのである (Extra Ecclesiam nulla salus) 渠の始原罪に對する考へも亦大に味ふべき真理である、渠はアダムの墜落によりて人類は凡て永久の罪に陥りその完全性を亡失したものと考へた、吾人は本來罪の深いものである、吾人が如何に自から善を作爲せりと考ふるも、神の眼より見れば善ではない反へりて惡である、罪ある吾人が自力にて善をなし得と考ふるのは神に對し此上もなき不遜である、夫故にアウグスチヌスの説によれば、異教徒の以て道德なりと思惟す

るものは、反りて「美はしい罪」に外ならないのである、即ち吾人の善をなすのも救はるゝのも共に教會を信した後のことではなければならぬ、教會は地上に於ける凡ての救ひの真理の所有者である、教會は地上に於ける「神の府」(Civitas Dei) である、教會以外のものは到底神に救はるゝ縁のないもので「魔の府」(Civitas Diaboli) である、即ち教會は吾人の唯一の信仰の對象である、實にアウグスチヌスの一生涯は、肉と靈との争闘である我に打勝つ争闘 (Kampf zur Herrschaft über sich selbst) である、而かもその争闘は遂に獲られたる争闘である、彼岸の目的に達し得たる争闘である、然らば如何にして争闘は獲られたる乎、他なし、我を捨て而して獲られたのである、全く神に頼りて而して獲られたのである、智は差別を意味し常に我の意識を伴ふものである、夫故に智はダンテによりて捨てられたと同じやうにアウグスチヌスによりても捨てられた、情は比較的無差別の性質のものである、吾人は情によりてよく我を埋没し得るのである、我を神の中に没して神人の合一を成就するものは情である、故に天國は情の領域である、かゝる神聖なる情は「愛」である、夫故に「愛」情はダンテを導きて天國に入らしめしと同じく、アウグスチヌスを導きて神の府に入らしめたのである、ファウストの真理の到底智識によりて到達すべからざるを見るや、魔術を研究し之によりて真理を發見せんとし而かも苦悶困頓せる渠は恒久の愛によりて救はるゝものなることを發見したのも之と同理である、蓋し智識は名に過ぎずして情は實を有するからである、

一切は情である、名はかゝる天國の情熱を被へる響き若しくは烟に過ぎない、

Gefühl ist alles;

Name ist Schall und Rauch,

Ummebelnd Himmelsluth. Faust.

(完)

心 靈 漫 筆

G T 生

一、近時宗教問題は大に世上を動かし、之に向て心神の安心を求めんとするの士日一日として多きを加ふるに至りしは吾人の大に祝する所なり、夫れ人一び母の胎内より生れ出で、食ふては寝ね、寝ねては食ふ、かくの如くにして人生唯五十を空過し、祿々野上の露と消ゆ、何たる寂しきものならずや、吾人幸にして此聖代に會ひ、貴き御教を味ふを得、若し空々星霜を徒費せば所謂實の山に入り空しく手を拱きて歸るに等し、何たる愚ぞや、既に人生は目的あり、抱負あり、之を遂行するは心靈の作用如何によるのみ、

一、吾人往々耳にす、宗教は悲觀的のものなり、殊に佛教は然りと、是れ宗教の何たる、佛教の何たるを解せざるの言のみ、固より佛教にては歴世觀を説く、先づ人間は罪の人なりとの論より之を脱離するの方便として厭世の觀法を鼓吹す、「諸行無常」といひ、「會者定離」といひ「明日あり」と思ふ心の仇櫻」といひ、「生者必滅」といふは即ち厭世觀より來る語なり、人は善行をなさんとするや先づ其前提として己が罪惡を滅して然る後之をなすを得るなり、故に吾人は其理想たる真如

の界に入る前提として厭世の觀法をなすこと恰も階を登るに下より段復段と登るが如し、豈あやしむべきことならんや、されど誤る勿れ、此厭世觀が佛教の全体なりと早計すべからず、吾人は最後の勝利を博せん爲め、邪惡の念、執着の境を脱離するを要するのみ、決して此厭世觀が宗教の目的に非ざるなり、

一、佛教の目的は歴世觀よりも却て樂天觀にあるなり、「我此土安穩、天常、人充滿」といひ、「天に踊り地に躍る」といひ、「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」といひ、「即ち穢身すてはて、法性常樂證せしむ」といひ、皆是れ樂天觀を顯したる言にあらすや、換言すれば厭世觀は眞の美、善を求むるの動機にして、之に到達したる結果は樂天觀を構成するなり、苟くも常識を有するもの誰か其身の汚れたるを感せざるものならん、深夜寂々人なきの折、胸に手をたきて來りし我、歸すべき我を考へなは自ら悔ゆること多々あるべし、此ときに際し全知全能の佛陀の温き御救を感じ、以て人の人たるの本分を全ふすべきなり、實に「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し我等が天上の信心を發起せしめ給ひけり」我等は如何に多き罪惡を有するも「盡十方天日光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば智慧の潮に一味なり」とあるが如く其罪業は忽焉として消滅し、佛陀の懷中に引取らるゝを得るなり、世を厭ふは世を樂まむが爲めなりといふ言、是れ厭世觀の價値を尽したるの言なり、

一、極樂地獄のことにつき大に世人を惑はすもの多し、「極樂は西方なり」「極樂は無邊際の上なり」と、是れ矛盾の言に非ずや、されど思へ樂は苦に對し、苦は樂に對す、苦樂は是れ相對の辭、

俱に心的状態なり、果して然らば情より名けたる境に向て、智を以て之を窮めんとす、是れ不可能のこと、吾人は此無量壽佛國、快極無極の妙境を心靈の實驗を以て感得するを得るのみ、何ぞ言を以て之をあらはし、筆を以て之を畫くを得んや。唯不可思議といはんのみ、極樂は斯くの如き界なる故、既に無邊際といひ、又西方を指すも何の妨か是れあらん、唯一方を指して其所信をかたむる方便のみ、一体和尚叫んで曰く「極樂は西にもなければ東にもなし、きたみちさがせみんなみにある」、「極樂はみなみにあるを知らずして西を願ふは拙なかりけり」と、是れ一片の諧謔なるも能く之を味は、想半はに過ぐるものあらん、「超世の悲願きしより我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土に住み遊ぶ」、吾人此樂境に達す其愉快果して如何なるものぞや、心は知相なりと雖も實相に入る時は即ち無知なり、是れ向上をたぐる稀世の玉言に非ずや、

一、佛教には知足を教ふ、されど是れ人がなすべきをなすべからずと解くに非ず、能く己が地位を考へ、其界を超ゆるべからずと教ふるなり、若し人にして能く之を知らずんば一生苦悶を以て了り、毫も心神の安心を得る能はざらん、吾人は世に處し理想は須らく大なるべし、遠なるべし、されど物に序あり、亂行を許さず、故に其實踐するや能く一步、一步と足を定めて進むべし、決して一段より三段四段に登るべからず、不知足は失敗の本なり、吾人は此知足の二字を誤解せず、分に應じて其本分を全ふすべきなり、左に佛陀の金言を示さん、

汝等比丘若し諸の苦惱を脱せんと欲せば知足を觀すべし、知足の法は即ち是れ富樂安穩の處

なり、足るを知る人は地上に臥すと雖も、尙安樂となす、足るを知らざるものは天堂に處すと雖も亦意に稱はず、足るを知らざるものは富むと雖も、而も貧し、足るを知るの人は貧しと雖も而も富めり、足るを知らざるものは常に五欲の爲めにひかされて足るを知る者の爲めに憐愍せらるゝなり、是を知足と名く、

一、宗教を求めんとするの士往々理論的より宗教に入らんとするの士多し、是れ大なる誤謬なり、前述の如く宗教上のことは内的實驗によりて佛陀の慈悲を感得す、決して筆紙の上にて之を求むべからざるなり、宗教は信仰によりて之を得、由來紙上の論は議論百出決して一致し難きもの、甲は是と考ふれば乙は非と斷す、されども宗教は情界より來るもの、議論などは寸毫も許さざるなり、見よ悉達多は苦行林に阿羅藍に會ひ、出離得脱の法を問ひしも、彼のいふ所の論は徒に悉達多の煩悶を増加するのみにして、到底入道の門戸を發見する能はず、是に於て斷然意を決し、獨り菩提樹下に端坐し、一心正覺を誓ひ給ひぬ、此冥黙沈思の結果は遂に悉達多をして佛たらしめたり、實に佛陀大覺の源は冥想靜坐に初りて、冥想靜坐に終れり、宗教は實に此無聲の聲、無音の音を感じて以て其妙境に逍遙するを得るなり、徒に書上に宗教を求め、比較研究の如きことをなすの士よ、須らく其書を燒き、沈思靜坐して佛陀の光明を感受せよ、「西岸上に人あり叫んで曰く、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難にわたるを畏れざれ、」此空中の聲を聞き誰か之を信じて之に奔らざるものかある、佛の有無、極樂の眞偽などを研めんとするものは未だ宗教の何たるを解せざるものなり、

義 務

人は義務を盡さんが爲めに生れたり、「英國は各人に其の義務を盡さんことを望むとは千古不磨の妙言也、世は常に各人の其の義務を盡さんことを要求して止む時なし、義務のためには、野心も、權勢も、黄金も、名譽も、悉く土芥視すべきは、吾人の豫め期する所にして此の如くにして、人世始めて價值あり、人間亦貴ぶべきを見る也。

彼の、野心の爲め、權勢のため、名譽のため、黄金のために、高貴なる自己の義務を忽にするは、其の人物未だ最高の地、極大の境に達し得ざるものにして、各自の義務を盡すべき一個の方便として、權勢を求め、名譽を求め、黄金を求めんとするは、吾人の極力務むべき所なりと雖も、滔滔たる世上幾多の徒が、唯黄金を得んがために黄金を求め、唯名譽を得んがために名譽を求め、唯權勢を得んがために權勢を求めんとするが如き傾向あるを見ては、吾人聊か其間に疑無きこと能はず。

權勢何故に貴きか、名譽何故に貴きか、將た黄金何のために貴きか權勢や、名譽や、黄金や、能く之を利用し、善用して以て、自己と社會とに、即ち極言すれば、人生向上の大義務に向つて、多少の貢獻する所無かりせば、此の黄金や、權勢や、名譽や、要するに皆空、吾人不幸、其の貴むべき所以を解し得ざる也。

義務の觀念は懦夫をして能く起たしむ、現時、世界の舞台に堂々濶歩して、雄渾、剛毅 敢爲、邁

進の氣象に富める者、恐らく、我が盟邦、英國々民に過ぐる者無かるべし、而も彼等が、地球上、最も多く義務の觀念に富み、最も善く義務を遂行する能力に富める民族たることを知らば、此の「義務」の果して何を意味するかに關しては、蓋思半に過ぐるものあるべし。

人は自己の人格の高く大なるに従つて、自己の義務の高く大なるを感ずる者也、義務の觀念無く、且つ義務を遂行すべき能力を有せざる徒輩は、決して吾人より人間として取扱はるべき權利を有せず寧ろ一死以て其の情驅の處置を速にすべき也。

忠といひ孝といふ、換言すれば、臣の君に對し、子の父母に對する義務に外ならず、論者嘗て言あり、

「西洋人、殊に英國人などは、權利だとか、義務だとか、小六ヶしい理屈を言ふに威張るさうだが、僕はそんなことは大嫌だ、殊に臣は君に對して忠なるべき義務を有し、子は親に對して孝なるべき義務を有す、なんど、言つては、折角立派な忠孝の大道も滅茶滅茶だ、日本人の所謂忠孝といふのは、そんな理屈から出たわけのものぢや無いので、臣は忠ならんと欲せずして自から忠に、子は孝ならんと欲せずして自から孝なのだ、それでこそ一個の美風として見ることも出来るが、臣子は君父に對して忠孝なるべき義務を有す、故に汝は忠且つ孝ならざるべからずと來ては、イヤハヤ、鼻持のなつたものでは無い……。」

此の説一理あるが如くにして、而も三文の價值なきを悲しむ、無論人間の道徳は、一々論理の法則に準據して斷案を下すが如きものにあらずと雖も、又吾人の行動に關しては、必ずや相應の經

路を經ざるべからず、盲目の愛情は禽獸尙ほ能く之を有す、論者の如きは、道理ある嚴父の愛情よりも、牝牛犢を舐むるの愛を以て美なりとなす也、法律繁雜なる現時の文明を否定して、無爲にして化したる堯舜の世を謠歌せんと欲する者也、其の所論の一顧にだに價せざるは言はずして明か也。

人或は曰はん、權利、義務等は、畢竟人間の製造したるものにして、大人は宜しく此等の上に超脱せざるべからずと、夫れ或は然らん、而も吾人既に生を人間に享けたる以上は、必ず或る程度まで、人間の製造したる規則の下に拘束せられざるべからず、否人間規定の方則を遵守せざるべからず、人或は天才不羈の語を捕へ來りて、以て、時に人類の法則を破らんとす、此等は要するに天才の盲從者たるに過ぎずして、口を天才不羈の語に藉りて、自己の不羈放肆を蔽はんとする、卑劣奸惡の徒にあらずんば、必ずや、古人の糟粕を嘗めて得たりとする子予者流に過ぎざるべし、天才にして若し人類の法則を度外視するものたらしめば、吾人は飽くまでも、天才の産出を咀はざるべからず、吾人は寧ろ一人の天才よりも十人の常人を取る、天才或は異常の時に必要なるべし、常人は不斷に必要也、天才不羈の語を以て人類當然の義務を没却せんとするは、一個異常の例を捕へて、以て大局を推斷せんとするもの、所謂痴人夢を説くに異る無し。

義務の觀念に支配せらるゝは、決して奴隸的服従にあらずして、人類の光榮也、自由とは決して放逸散漫の謂にあらざる也。

義務のために、名譽を棄て、黄金を棄て、權勢を棄つるは、吾人に於て決して損失にあらず、否

吾人は反つて、義務遂行の結果として黄金、名譽、權勢の必ず伴隨し來るべきを信する者也。

進め、義務は汝を待ちつゝなり、義務遂行の苦痛を云爲するは既に卑怯の極也、義務の束縛いかに強くとも、決して顧慮するを要せず、勇進邁往、巨腕を揮つて、義務のために戦ひ、義務のために死する者、是れ所謂人生の勇士也、挂冠は宜しく此人に加へらるべき也。(三十七年五月)

一言を許せ

飯 森 梅 男

友麥野薰(假名)四月廿三日我を訪ふ。坐に着いて未だ一語を發せず、大に其平生に異るあり。良々久して彼が唇頭の怪しく震ひ雙眸の涙に潤ふを見る。恐くば心中何等かの憤懣鬱結するあるならむ。我忍ぶ能はずして彼を催せば、彼決然語を放つて曰く、聞け君よと、堅く握られたる彼が拳は戦きぬ。

『聞け君よ、僕は今僕が胸中に鬱結したる憤懣を語らうと思ふのである。僕は今日某課に呼出された、何事かと急ぎ行けば、該課員は僕を近づけて問うて曰く、君は麥野うたなる女を知つて居るか。之を聞いた瞬間僕は實に驚いた、否驚かざるを得なかつた、僕を知ると深き君はまた等しく驚くであらう。僕は某課に呼出されて斯様な事を問はれるとは夢にも豫想しなかつた。何故豫想しなかつたか、何故驚いたか。そも麥野うたとは僕を愛すると深き叔母上である。其叔母上の名を何が爲めに某課は問ひ糺すのであらうか、僕は其意の那邊に在るか

を解するに苦んだ。然し僕の叔母上なる以上は何の躊躇する所もない、直に其旨を答へた。此問答の數秒間僕は唯驚きの中に彷徨して居たのであつた、が然し僕は更に大なる苦痛を感じざるを得なかつた、それは何んであらう、課員の言は更に僕を侮辱したからである、實に侮辱した、既に侮辱された、如何で苦痛を感じざるを得やう。

課員の發した言は斯うである。私は君が小膽なる人であると平生思つて居る、だから決して不都合な事はあるまいが、然し嘗て我校に女子から手紙を送られた爲め、禍を被つた人もあるから、斯様の不都合も無いやうにと注意するのであると、要を摘まんで言へば斯うであつた。そうして僕の叔母上から來た手紙を渡された、僕は怒氣天を衝かむばかりであつたが、餘りに情の激した爲め、遂に一語其無禮を責むるなくして某課を去つた。あゝ君よ、君は何と思ふか、僕は僕の叔母上から手紙を送られたのである、然し不幸にも僕の宿所として學校を記したため、其手紙は短くとも一日は學校の手に留められ、果ては此無禮なる申渡となつたのである。某課の意を忖度して見るに、僕が何か怪しき婦人から手紙を送られて、其者と僕との間に忌む可き關係があるものと推斷し、爲めに僕を呼び付けたのであらう。然し君よ、僕の叔母上は僕と同姓である、同姓である上に僕の家と同村に住んで居る、そして今度の手紙にも其住所を明記してあるのではないか。生徒の原籍現住所等の届出を處理して居る某課である以上は、若し僕の一身に關して疑ふ可き事があると考ふるも、其同姓なるを知り、更に其住所の同村なるを調べ得たならば、其記名者と僕とは何等か血族上の關係ありと推察す

ることが出來よう、然し更に其猜疑の念を逞して僕を怪しむとしても、既に表面上これだけの事が知れて居る以上は、其本人を呼出してまのあたり之に無禮を加ふる必要は決して無いと信ずる。斯る無禮を加へ侮辱を敢てするとなくとも。他の方法によりて、若し有りとするれば僕の身の怪しいことを探知し得るでは無いか……』

語らむと欲して言己に盡く。彼が血涙彼が切齒、よく彼が心中の悲憤を表はして餘りあり。我未だ彼に於て今日の如き激越の調を聞き、今日の如き憤慨の態を見たるも無かりき。之を見れば、前後數分時の間に於て如何に多大の無禮が此一良生徒の上に加へられたるかを推察するに苦しからざる也。怒氣の人を驅りて無明の深淵に陥るゝを思ひ、平生勉めて之を制しむる我も、一度彼が言を聞いては如何で此妄狀に怒らざるを得んや。然れども情うちに激せる餘り、彼を慰めむとするも爲めに一辞の我唇頭を洩るゝ無く、唯兩々相抱き紅涙を天に捧げて、其公明に訴ふるありしのみ。

我等此處に存在す、既に存在する以上は、我等に父母あるや明なり、兄弟姉妹あるや明なり、親族あるや明なり、更に知己朋友あるや明なり。既にこれあり、之と親み之と交るは其道にして、我等一と度彼等と其居を異にせむか、則ち書信の往復ある可きは又當に然る可き所にあらざるや。我等が笈を負うて遠く此金澤に來るや、且に雪嶺千秋の雪を仰いで心事の高潔をたぐへ、夕に北海怒濤の響を聽いて正義の叫びの大をきはへつゝ、いそしみ學ぶ時の間も、忘れ難きは家郷にあらずや、面影にたつは友にあらずや。斯の如く彼等は常に我等の念頭を去らざるなり、而して獨

り我等に於て然るのみならず、彼等も亦其業務に心を勞する側、永はに我等を忘るゝ能はざるなり。是に於てか我等一封を北風に托するや、彼等が燈下に之を樂む狀眼前に浮び來り、彼等また忙中筆を走らして、遊子の情を慰むるに勉め、彼等が一片の書、或は聖賢の教よりも尊く、或は管絃の樂みよりも清きなり。

彼等と我等との關係既に斯の如くんば、彼等か老たり幼たり、將た男たり女たるは、敢て問ふ可き所にあらざる也。然るに何んぞ我某課は其發信者の女子たるが故を以て、之を詰問せんとするか。而して我友麥野某の場合に於て、如何に深き猜疑心を以てするも、其疑の大半は解け去る可き證據十分明白となりし以後に於て、其行動が靜に其書翰を渡すに出でずして、從來婦女子より書を送られたるが爲め禍を被れる者あるを以て、豫め注意すといふが如き言を弄して、嘗て道ならぬ關係を存せる爲めに我校を退けられたる痴漢の場合と、全然同一視するが如き態度に出でたるは、實に生徒を侮辱したるのみならず、更に進んでは、如何に公明なる關係の其の間に存するありとも、我校は全然男女間の交通を否認するものありといふ、一種の宣告を與ふるに異らざる也。公明の其間に存する男女の交通を否認するが如きは、眞に無法の極にして、敢て之を駁するも恥しき程也。否、我某課と雖も斯の如き無法の宣告を與ふる事萬々無かる可しと信す。然れども苟且にも前掲の言を弄するが如くんば、之れ則ち幾分か親子の慈愛を削ぎ、同胞の友愛を削ぎ、親族知己の親愛を削ぐものに非ずや。然り斯かる處置の一と度我等の親族朋友に傳へらるゝあらむか、親族朋友は單に己れの婦女子たるが故を以て親愛する我等に累を及ぼさむとを虞れ、語らむ

と欲する所あるも強て之を忍び、其書信の數を減せむと勉むるや、火を賭るよりも明なり。然り、而して猶之を以て親族朋友の温き愛を裂くものに非ずと言ふ者あらば、我遂に辭なき也。

讀者或は我が言を以て狂激に失すとなさむ。然れども我豈に徒に過激の言を弄し、以て一時の快を貪らむとする者ならむや。某課に對して相當の尊敬を拂ふ可きは、我もとより之を知る、實に之を知るといふのみならず、之を實行するに於ては我敢て人後に落らざらむを勉む。然れども平生自己の價値を重せむとする我は、斯の如き非禮をも暗黙の中に葬り去るが如く、爾く卑屈の徒に非ざる也。故にこゝに某課を難ずると斯の如く、更に、某課が此非禮を謝し嚮後意を用いて此失態を重ねる無からむとを切望して止まざる也。而して某課にして意をこゝに用いなば、獨り我等の幸福なるのみならず、實に該課の威信、否學校其者の威信を保つ上に於て大なる力あるものに非ずや。若し夫れ然らずんば、我等が某課を信賴せず學校を信賴せざる結果の、那邊に及ぶ可きか、眞に測り知る可からざる也。

然れども翻つて思ふ、某課にして此舉ある、罪もとより彼に在りとはいへ、我等に於ては全然其責なしと謂ふ可からざる也。見よ、婦女子との邪なる關係ありし爲めに、我校の歴史に拭ふ可からざる汚點を印せし痴漢の、殆んど毎學年之れ有りしを。之れ亦もとより教育當事者の責を負ふ可きや大なりと雖も、諸種の事情の纏綿するに於ては、獨り當事者のみを責む可きにあらずして、畢竟其大半は彼等自身の罪に歸せざる可からざる也。然り而して若し我等にして疑はる可き弱點を有する無くんば、豈に今回の事件の如きもの起り來るありて、彼我相反目せむとする不吉

あるあらむや。之を思はば、獨り某課をのみ難するは我等の探る所にあらずして、我等は該課に一言を呈すると共に深く自ら省みて自己の人格を修養するに勉めずんばある可からず。時や新緑將に深からむとす、默想沈思希くは怠る勿れ。(明治三十七年五月十五日稿)



南去北來人自老
夕陽長送剪船歸
(杜牧)

文 苑

紅 蘭

水 衣

今更ながら燈の影にしつと見つめるとこれをと云はれたのが思ひ出される

雛ひなの様な華奢きゃしゃな小指こゆびに花籠はなごを携へたのが都ぞ春の錦なりける咲き亂れた櫻こけりの樹陰稚輪こけりに結ゆひ立ての緑髪ろくはつ和う目の眩惑さむるばかりの紫の被布ふきに燃もえ立つ様な緋ひの飾房無心の涼しい眼に花籠はなごに纏まとはる白い胡蝶の眺めたのが年の頃十二三あまり折からさや〜と青柳の糸が風に亂れた

醫王の峯の頂にまだ消え残る淡雪が既に斜を越えて傾いた夕日を受けてそこに微風かぜを負おふ星のるまひを秘めて先づあらはれんの思けふ花曇はなぐもの空を五彩に畫く帷帳かまくらをいろそふる霞あせにまかれた丘のあなた若菜摘わかざえむ子をあざむいて靜肅しんじゆとした春の黄昏たごがけを渡り行く鶯うぐいすの聲

感極まつてひしと集しゆの上に想を辿たどらせたがさすが夢心地の弱よわきにあらず胸をたさへて通りぬけに其時右手をめぐつて前へひら〜と其胡蝶

はや迫り行く峯々山々の淡墨色に葦の被布ひしほが一層色を浮ばせて瑠璃の宮に珠清水汲んでひそかに盛もいた更に雪をあざむく心にくきをどめ、花籠はなごに束ねた紅の花の二つの一つを双の頬に色も立てず銀鈴の様な聲すゞしく唯これを

でぬ。わつと一聲田畝に向ひし隣の家の座敷より飛出したるは、一人息子の静馬君、當年取つて十
二才。高等二年の腕白盛り、今母君に叱られて逃出す所、前例によりて小林が出で、母君に詫びて
静馬君をも伴ふこととなりぬ。薫を籠めたるハンケチを取出し、涙に呉れし静馬君の顔を拭ひし
母君は、仲直りとして菓子一袋を山中に托せるを嬉しき。田畝一つこえて丘の下に一休みすれば、
近くに見ゆる茅の軒、破れ障子の甚だ詩的ならざるに、氣味悪き梅干を並べたるは更に厭ふべし。
此所は岩淵山の裾にて、地少しく高ければにや、街道は一目にて町の一部を遠景に見る。左なる
は帝釋天。右に聳ゆるは瑞泉寺。其屋根何れか高きと静馬君が云へば、小林は寺が高しと云ひ、
山中は帝釋天の方高しと云ふ。口論果てしなれば、終に静馬君の菓子を開きて事すみとなりぬ。
今しも工場の漚笛は帝釋天の大鼓と和し、喧々又轟々、炎々たる天に、風死し、水涸れたる此焼
野、今はたまらじと四人一團となりて走るに、流るる汗は瀧の如くにて、白雲涼しく岩淵山に懸
つても、汗と砂の一行四人、見向もせずしてひた走りにぞ走れる。

一枚一枚皮を剥がれし如き心地して、蟬聲漸く至り、岩清水の点滴、襟に入りて驚く迄は、殆ん
ど生きたる心地もせざりき、見上ぐれば天に聳ゆる山。山の中腹の松。松の間の瀧。白き泡をた
て岩を撃ちて落ちたぎる勢、煙に似たる白雲の岩間岩間に湧き立つ様、蒼空に入り亂れ飛ぶ鶯の
群、四人を嘲笑するが如くに飛び交ひ飛び交ひて、再び其巢に歸り入る、

夏なほ寒き黄金の瀧。岩淵山の奥なる黄金の瀧は、實にこれが、瀧の掛る絶壁は一枚の屏風の如
く、只見る天に接して、一線を畫しつ。屏風の面に畫かれしは、颯々の松、崎嶇の岩、虚空に響
く叫喚の水、山高くして日を遮れば、瀑聲いよく大にして、松は益々緑なり、絶壁の南西少
く低くして谷一つ抱ける所、一道あり。吾等は進みて、木を潜り、草を分け、見えつ、隠れつ、
登り行き、終に岩淵の奥なる小室にこそはつきにけれ。

芝草の上に横はれば、木は緑に、風は涼しく、密葉深く屋根の如くに蔽ひかゝれば、木葉風吹く
に従て或は日光の漏るゝ事もあり。柏葉の粗密に従て影に濃淡あり。葉多ければにや稍重く垂れ
て水に入る。水は鏡の如く動かざれども、清くして底深く映り、彩りたる如き底の岩。或は角立
ち、或は凹み、時に緑の藻の間よりつと泳ぎ出づる魚のあれば、人に驚きて這入る蟹もあり。水
の凄からざる、罔雨もひそまぬ心地せし嬉しき。静馬君が寝轉びて、手を水に入るれば、水動さ
て或は波を描き、或は泡を立て、細き腕は水に冷えて益々白し。小林は恍として半眼なり。山中
は寫生をなす。これ實に希代の勉強。己にして樹葉陣々、清風切りに至り、燃紊れし汗も退き、
煮え漲りし血も今はさめ、悶へに悶へし山路の苦もことごとく忘れ去りき。

静馬君は十二の腕白盛り、されど父君、母君の心の底を探らば、只静馬君の外はあらじ。時に父
君外に悶へて、内に静馬君の眼の輝きに遇へば、悩み一時に消れて、人生の活動を新にせしむ。
時に余の家の二階より見れば、母君の切りに針動かし玉ふは静馬君の筒袖にあらずして何ぞ。若
し夫れ、學校の歸途袴を破りて歸らば、母君の喜び更に深しと云ふ。

静かなる哉。岩淵山の緑陰。樹の柱。葉の壁、實に仙境と云ふも可なり。一度樹間より頭のみを
出せよ。忽ち眼界急に開けて、遠望平野漠々、黄金瀧より連なれる天谷川は、岩淵つゞきの山々

をめぐり、緑樹点々の中を迂曲して遠く白雲に包まれたるを見ん。余は嶺をこめし白雲を見つめ居りし中に、再び夢幻の裡に入りぬ。夢の裡切りに、小林の大聲をきく。曰く何々動物、曰く、何々科植物、と。又時には山中が聖書の朗讀をなす聲。然り而して靜馬君の嬉々たる。何ぞ夫れ樂しき。あゝ、これ、眞の樂園乎。天然の動物園にして、亦自然の植物園を兼ね。しかも靜馬君は師までも得て。麓の方の松並木、凄く轟きて、魑魅の相搏つが如く、暗澹の蔭西方より來りぬ。破笛の如き晚風一度ならず、二度迄も、歇みたるかと思へば餘韻消えんとして消えず。小室の池も漆を湛へし如く物凄くなれり。

歸途中は云ふ。此畫板を重しとせぬも、只だ書き上げて靜馬君の喜びたる顔の見たきのみと。小林の採集箱、余のインツブ物語、何ぞ又目的の外に出てんや。

花の香

斗

牛

空長閑なる花曇の、二日三日打續きて、小雨しめやかに、柳の糸うちけぶりぬる昨日今日、よもかくまでとは思ふばかり、はれ／＼しう晴れ亘りて、且の風の心ありげに、少しは散り失せられた、なほ春のかたらひこまやかに、匂ひ出でたる花の枝を訪へば、待ちつけぬと云ひたげに、はら／＼と梢を辭すらむ風情、春のあはれさのふと惚ばるゝこそゆかしけれ。

今日は鎮守の祭りとして、里神樂のありとぞいふなる。面白くもなきもの見きたりとして何かせむ、

若かず、青春のわれに通へる野山に憧憬れて、春のあはれを、心ゆくばかり身にしめむにはど、思ひ定むれば、のどけき日の光のいざ／＼と促す如きに、折から坐にありし、やさしきに似ぬ名の寒岩の君そゝのかして出立ちつ。羽織打ぬぎて、わざと夏帽戴き、袴にステッキの我姿の、いかに物狂はしげになりけんかし。

心あてもなく歩みを運べば、うら／＼かなることいはん方なく、あれこそ例の弘法大師よなご、かたみにの／＼しりつゝゆく。あゝ弘法大師、われは忘れんとして忘るゝ能はざるなり。そゝろに涙さしぐまるゝ、悲しき記念にもあらず、はたそのかみのたのしかりしを思ひ出の、そゝろ血の湧く記念にもあらず、清瀧橋のこなたにとばかり小高う、杉などの二本三本立ちたる奥に、弘法大師のさゝやかなるほこらあり。去る日、寒岩、櫻谷の二子と共に、そゝろありきのかへさ、この御堂に詣でにし時、田舎人と見えたる人の三人ばかり詣でゝありしが、年若なる人と、老いたるたうなど二人、御堂の前の腰掛にうちかけて、柏手高う響きしと思へば、其の腰掛のこはれてや居たりけん、はたとばかりまろばんとしつるを、はつかにこらへたりしが、柏手せんとして合せたる手をそのまゝに、高く擴げてうち驚ける様のわかしさ、今も尙眼を去らず。奇遇とも、可笑ともいはむ語も知らずになむ。

その弘法大師のあたり、武夫にたぐへてたぐへらるゝ花の、數しらぬほど咲き亂れたるを打眺めつゝ、橋畔に出でゝ、去年の春以來、なじみの茶屋にやすらひ、水に臨めば、思ひ出の影のくさ／＼の、春の光を蔽ひかくしぬ。

あゝこの茶店、照る日地を燼く水無月の、熱さ堪へがたく、闇の舎の君と共に、緑陰風清く草青きに、身を横へし時、いまし、いかばかりわれをなぐさめしぞ、流るゝ水のせかれては、激する音は驟雨の如く、時に水をわたりて吹く風は、浴衣の袖にえもいはぬ夏の香を送りたりき。野山を裝ふ紅葉の錦、われに林間にあたゝむべき酒なけれど、せめて侘なりとも憊はむものと、櫻谷の君と共に、たゞろを分けてさまよひつ、紅葉かざして行秋をうたひし時、いまし、いかばかりわれに情ありつるぞ、流るゝ水もいと細う、秋の衰れを唄きて、われにも、たもはず、ミューズのヴィナスのと呼ばしめしよ。

思出多き人の世は、夢幻にも似たるかな。過ぎにし方を見返れば、霧やかかりし臆げに、それかとぞ見る春の夜の、月の影さへ空ひくゝ、明け行く光にけたされて、薄れがちなる人の世の、記臆の跡のはかなしや。末はいかにと夕潮の、さしくる磯に忘られて、訪ふ人もなき捨小舟、葦の葉風にさをはれて、我にもあらで行末は、見る目廻けき海上の、波のまに／＼西東、漂ふひまに舵を絶え、今は望もあらし吹く、時をそかれと祈りつゝ、さそふ水には稻舟の、そこともわかぬ人の世の、成り行く末ぞうたてきや。

彼を思ひ是を想ひ、想像は端もなかりしが、見渡せば、遠山霞、今はあとなく晴れたれど、遠方は紫して、うらゝかなる日に照りはへたる櫻の花の、ほろ酔加減の色美しう、緑新しき畑中に、菜の花のうち交れる、うるはしき眺めなるに、折々訪づるゝ春風も、花を散らさぬ程に吹き、融融たる春光千里にあまねく、春水之を溶かしては、其波爲に緑なり。

薬師へ詣づる道を左に折れて、路のほとりに生ひ茂れる、緑の小草を分けつゝ行くに、寒岩の君、幾何の問題をかつぎ出して、われを苦しむ、元來數學の事にはうときわれ、わざと話を他に轉じつゝ、かたへの小高き丘に駆け上るに、疎なる竹藪の中に、稻荷のらしき祠あり。そをうしろに持ちたるステッキ早速の獲物、上段に振りかぶれば、寒岩の君とて芝居心なきに非ず、一段低き所に身構して、かたみに、わたり白あり、切結ばんとしたりしが、鳴物なければ物にならず、元の路に立ち戻りて、笑ひつ狂ひつのとしりつゝ、人の見ざりしこそせめてもの事なりけれ。

路もせに枝さしかはして、十本にあまる櫻の花、その下陰の小草ねよげなれど、行き暮れたるにあらぬわれらの、今宵の主とたのまぬ恨、……

陽炎立つか金線銀線眼にまばゆく、水や流るゝ潺々鏘々耳にかしまし、あはれ、造化の神、われらをいかに爲したまふ、世の争とや、そは何、人の悲しみとや、そは何、われ早や此の世の人にあらじ、天上か、はた極樂か、げにたもしろの天地なるかな。

木の下闇を縫ひ行けば、路は七曲り八度折れて、遂に打開けたる畑に導く。右の傍、櫻の連りたるに、若人の五人六人、楯によちのぼり、鄙歌うたひつゝ、花や摘むらむ籠を抱へたり、春日の野邊に若菜つむ、それとこれとは異れど、日かげのどかに風軽ろく、春それわれか、われそれ春か、天地長へに悠々たるに、どくるか、ゆるき鄙歌の一節、花に小鳥に野に山に、至らぬくまなき春風の、散り來る花と諸共に、包みて水に乗りもせば、水は流れて遠方の、野末にまでも運ぶらむ。

馬、車などのゆきかふ中を、檜泉の方へと歩を移せば、若草萌ゆる春の野に、鹿の子まだらに
むら消ゆる。去年の古雪の名残なるらむ。疲れたる足引きて家に歸りしは午すぐる二時ばかり。

其あした、春雨しめやかに打けむりて、何となう心細きに、たのしき昨日を思ひ出の、しの
ぶの草の露の玉、硯にうけてかくはものしつ。

紀伊庭八郎事

村上 函 峰

往年余見伊庭八郎於長谷部是水塾。把臂締交。後余西游有年。戊辰王師東征。余得藩命東歸。
會八郎與林忠崇率兵三百人。要王師於函嶺。余見之逆旅。說以名分。八郎不可曰。薩長藉名
王命其實賊耳。何名分之有。我藩遂應之。八郎提兵百餘。入小田原。俄而藩議一變。與八郎
絶。迎王師。余以藩命說八郎曰。以寡當衆。不利。不若且航房總以待時機。八郎曰。見敵
而退怯也。吾將一戰以決勝敗。奮臂去。率其兵據山崎。山崎距小田原僅里許。突起道左。三
面斗絶。嚴備以待。藩兵爲王帥先鋒。悉力仰攻。彈丸雨注。士卒趨起。乃分兵出敵背。敵潰走。高橋
某。石川某。左右當八郎。斷其左臂。八郎右手揮刀斬二人。衝圍而逃。出伊豆。搭船達箱館。
與榎本武揚會。逆王師。裹瘡數戰。自盡而死。八郎爲人。軀幹不甚偉。白皙俊爽。尤長武技。獵
涉書史。好氣節。議論鑿々有據。與之論去就大義。意氣慷慨。以死自誓。聲淚俱下。余亦泣。嗚呼
八郎之舉。合義與否。余不得而知也。然昔者王彥章致忠於朱氏。歐陽脩取其偉迹。德川氏與

朱氏。固不可同日而論也。而八郎所在苦戰。一死以殉節。可謂不欺其志矣。八郎長余一歲。
死時二十七。今而思之。未嘗不慨然。故略記其顛末。以告下與八郎相識者。

森の泉

及能 秋 風

草花香ふ野の森に

下りて小魚の泳ぐなる

清き泉はこもりたり

流に羽をひたすなり。

わたつ大海の底ふかき

木々のしげ葉をもれながら

緑に珠のこそむごと。

旭は岸にさき出でし

森の泉に涌く水は

こけらの花のしら露に

草にあふれて未遠く

曙の光をやごすなり。

白き小石の底清み

白日静けき森のかげ

野邊にさゝらくあさながれ。

泉は涌きて流れつゝ

日毎小鳥は岸に生ふ

空かけり行く彩雲の

楠の大木の古巢より

影をひそかに抱きつゝ。

雪とま白き蘭の花

夕の靄にうなたれて

森のつかさの黙するとき

泉は星とほくゑむよ。

× × × × ×

根芹をつむと手をとりて

森のいづみに立ちしとき

二人の影のうつれるに

含羞はぢらひの顔あからぬぬ。

一人小笹の舟とりて

泉の岸に下りたてば

一人すみれの花二つ

笑みて静かにのせたりき。

それもはかなの夢なりき

森の泉に美はしき

姿うつしてうたてくも

いづち行きけむかの君は。

童はひとりさびしさに

今日し泉にきてみれば

まろぶ眞珠の如かりし

清水はいと細りけり。

泉のあとのうるほひに

ほくゑむ小さき艸花の

ほのかにゆらぐま白きを

童はひとの魂と見ぬ。

なせか童はいくたびか

たゆたひつゝもその花を

摘みて去りたるその日より

泉は永久とこほに涸れてけり。」

小詩六首

小扇

いづれよりいづれへ

白き雲の七重八重。

なにぞあふぐ胸の底に

かくも妙たへなる泉ひゞく。

そとわきの椽にちさき扇の

其雲よびて舞のひとさし。

見る見る泉あふれて

我と関あぐる北満州の原。

征衣

わよそこれ十年のうらみ

手綱くれて塞をうかへば。

霧ふかうとさして

文苑

篠原水衣

あゝ誰か泣く胡茄のびゞき。

長鬣ちゅうりょうにさのふの夢のせて

征衣に散るは何の不祥。

撫然ぶぜん亡なき戦友せんゆうの寫眞しゃしんさぐれば

月更に遠し長江萬里。

れもかげ

薔薇さざびはとほに露ありと

ちいさき胸にうなづきつ。

母のかひなにあまかりし

流轉るてんよなれはいまいつこ。

深山みやまのみなる雪の春

いろなす野邊の名なし草。

摘む子かすかに歌ふとき
そこにさびしき我がなんだ。

れなじ小萩を前にして
をどめが檐に風鈴の。

笹 矢

花散るかごによりそふて
時によよふ旅鳥。
啼く音あはれと囁けば
まだ夕榮のちさき雲。

やがて風落ち月のぼり
ねられぬまゝに窓をせば
眞晝に見たる緋の房の
籠にりんく鈴蟲の。

決 死 隊

あかきは漠の血潮ぞと
それこし小矢の我袖に。
何とは知らずをさな子
征露の歌に露ちりぬ。

闇を漂々何の行方ぞ
蹴り立つ荒波渦まく千尋。
閃光ぬひてあらはれ出づる
霧にまがれていくつの黑影。

鈴 蟲

いましのぼりし十五夜の
月にすゞしく音も清く

旅順口頭嵐はさむう
やよひの故國は花の眞盛。
思へ男兒桑弓を握る時
風蕭々の歌は古りたり。

○

清 美

軍召しぬ、鋤持つ男子を置きて梅散る里をひとり出でにき
花にそむき杉菜亂るゝ野にふして我がこの春や青葉にくれぬ
流笛たかく霞に消えていざらば越の枯野よなつかしの里
弔ひし芭蕉の句をばひろひ讀む俱利伽羅山よ暮るゝ春雨
花とりて歸る古城の夕月やうつむきがちの額ほの白き

○

緑 環

巢へ歸る燕のかげはほの消えて霞にくるゝ山の尾の村
夕月夜董つみてし歸るさに瀛車の音たかく菜種に消えぬ
銃とりて長白山の雪踏めば涙さそひぬ十年の昔
砂山を春雨あびて友と行けば桃暮れゆきて小村を近き
砲の音に露營の夢の今さめぬ黄砂に置ける霜白き朝

○

水 衣

をさなぶり鐘樓のぞきし人の朝をかさむ憂き春かくて老いんか
棚にのびし葡萄に風のそよめいて蔓にかゝれる淡き三日月
其君かねざめの窓に琴のすさび隣に水を汲む音あらしき
伏して聞く誰が舞すがた波の鼓云はゝこの貝夢のうつろひ

心地してゑまひにさをふ櫻橋あらじわかれは遠の水末みづすゑ

○

秋風

やぶかげの歌をしるべにどめくれば椿緒にぬく里の少女ら
かりそめの心あかし人なくて花の紅きをとかむすべなき
草の香のほのけき夕野末なる椎の實落ちぬ眞清水の中
小山田に早苗とる妻がつげ櫛の落ちしを髪にはさみやる哉
新妻にいづまと新墾にいひる山の白露にぬるもうれし夏のあけかた
舞の子が化粧の水を流しけり山吹たわむ庭の夕川
花園の小路にあはむ君ゆへに此花東の捨てもかねたる

五車反古

紫雲

五車反古人清貧に古裕
梅干や赤う染みたる妹の爪
牙子や灰汁槽の小天地
草鹿の糸切れてゐる若葉かな
青によし奈良は青葉の月夜哉

立ち寄れば狩衣ぬる藤の雨
羅や守り袋のちよと見ゆる
再建の寄進の札や桐の花
紫陽花に鳩の飛ひ来る朝日かな
草市やうなるを伴れし青女房
雲の峰潮汲む海人の素足かな
ふくれたる和尚の腹や蚊帳の月
揉瓜や我が妻賢にかこひ酒
うまさうに瓜喰ふてゐる坐頭かな
繪扇や京の舞子の眉淡く
葵さく奈良の小家や青簾
繪團扇や御殿ごどのに月を待つ夕
金襖に牡丹影ろひ青疊
短夜や厨の灯酔の匂
月の里水よき宿の洗ひ飯
卯の花に靈山の御水賣る翁
塗沓の朝露踏んで牡丹かな

うま人の形代流し姿哉
病牀の君一匙の水かな
朝の蚊や油しめ木の塵埃

青梅句稿

外 圃 生

錦の花もはや行春の庭の若葉の隆住居、衣更着の昔のみ思ひ起されて、朝な夕な世をしのぶ涙の雨、やがてはつれなき人の手に渡りて荒きむしろに梅年の老の赤耻さらされむ、たゞそのみを憂ひつく今は見る影もなき面輪の青々さ病がちな身のあわれさと思召せや。大方の惠深き人、幸なき我をすくひ玉へ、只幼きより風雪にさすらひし身のさう酸味も苦味も候はむ、たゞ堅きく真心の種子のみ汲み給へよ、それもかなはずば最早何とも申上げじ、心なきなく吐き出し給へ、鶯の法華經も頼み置きたれば冥途は先づ往生安樂あなかしこ、外圃庵の梅女が申す

日は峰に 欄干くる、櫻かな
柳や、青む 鮎屋の二階かな
雉子なくや 雨の砦の坂の下
兵燹の 伽藍の跡や 土筆
切髪の後すがたや 春寒し (遺 族)
紅梅や 髪を切つたる 人の妻
春寒し 櫃の中なる 骨 佛

穴を出る 蛇の頭を叩きけり (旅順港攻撃)
城門に 柩迎ふる さくらかな (戦死者の死体來る)
二人して 外れ矢をさがす 杉菜哉
佛刻む 嵯峨の石屋の 柳かな
春風 に 倒れ給ひし 佛かな (二日叔母腦充血にて死す)
今頃は 浄土に 目覺めたは すらん (眠るが如き死顔を拜みて)
天の春 孫の夢 みる 目も有らむ (生前孫を愛す)
孫居らす 春のふところ 寒からむ (悼) 五月塞に詣で、
君が魂 蓮華の御座は 涼しかる (温泉宿)
客に乞ふ 狂画の 讚や 春の雨 (十一日大隊訓練)
練兵に 踏み 残されし 土筆哉 (十三日、行軍雜吟)
春の風 校旗は 古く 破れけり
草鞋かへて 行き遅れけり 春の旅 (演習二句)
春の山 敵兵 見えて 旗をふる
敵兵の 崩れに げたる 菜種哉
老鶯や 大本營の 會議の會 (大本營會議)
橋や 神殿に 飛ぶ 雀の子

衣更へて戦の君を思ふかな
 十年ののぞみ甲斐なき裕哉
(留守士官)
 衣更へて臺灣へ行く兵士哉
(守備交代)
 剣賣つて洛陽をたつ若葉哉
(志不レ行)
 停車場に餅賣りにくる柳かな
(松任驛)
 御庭や笠松いくつ春の雨
(夜句を集む) 十五日
(色即是空)
 燕や乞食物くふ橋の下
 花杏加賀の朝の曇かな
 京湯の淺黄納簾や春の風
(繪馬堂)
 奉納の木大刀の額や梨の花
 七尺の額仰ぎ見る柳かな
(軍國の民)
 各々が拳堅むる歳かな
(舉國一致)
 出征を山も笑ひて送りけり
(捕虜二句)
 歸る雁外國に泣く夜もあらむ
 日本の日和に眠る露兵哉
(革命黨の蜂起)
 民草に燃ゆ立ち易き陽炎や
 城見する招魂祭の日永哉
(招魂祭) 五月六日

兵營の造り物見る日永哉
(公園の餘興)
 公園の瀧に灯ともる櫻かな
(金州丸撃沈)
 花百枝あつたらものを折られけり
(病兵歸來)
 鶉ともならで田鼠の歸りけり
(露國の傲語)
 煮らるとも知らで田螺の鳴音哉
(露英に媚ぶ)
 出代の口先うまき男かな
(東虹書會) 二日
 函の會にくれ行く春を惜みけり
(街頭所見二句)
 支那人の物賣にくる日永哉
 橋詰にバツテラを貸す柳哉
(族順口閉鎖) 五日
 陽炎や臭き物には蓋を置く
(捕虜の吞氣)
 沼日南蛭と田螺の機嫌かな
(第二軍上陸旅順港孤立) 十二日
 水堰きて目高狩するあやめ哉
(亞總督敗走)
 泥鱸めが逃足早き根芹哉
(体格検査) 十三日
 本讀んで我番を待つ日永哉
(幸に無病息災)
 筥の小さく堅く育ちけり
(十句選來る)
 蘭燈に春の句選の名殘哉
(雜吟二三) 四月十日
 留守邸の御庭普請や躑躅さく

黄檗の鐘きく宇治の茶摘かな
咲いた咲いた大山櫻 旭さす

(旭 櫻)

一枚の吳塵に錢とる櫻かな

(金の世の中)

格子から僧に錢やる燕哉

春の雨茶碗たぐいて唄ひけり

(魂陽會) 十三日

祭壇に三千の燭霞みけり

(露帝祈禱會の畫)

驚いて蜂に杖振る盲人哉

(馬賊の襲撃露軍大に驚く)

短夜の敵斬る夢もあらむ哉

(遠征の君を思ふ)

號外やあけ易き夜の鈴の音

(號外!! 號外!!)

蝙蝠や朝鮮町の軍宿

短夜や更に敵追ふ銃の音

立ちつづく幟に望多き哉

(韓國經營は第二の國民?)

一聲は空行く雁の名残かな

(送磯田先生) 十八日



雑報

紅緑代謝

昨日までも雲か霞かと眺められし櫻もいつしか
地に委し水に流れて、山吹の黄葩の香も牡丹の
嬌艶たる姿もあはれ昨日の夢となりぬ、鮮研た
る杜若江邊に笑み、紫藤水上に影をひたしつ杜
鵑血に啼き鶯滴糸の如く煙ぶり螢火点々江を渡
りて終に夏は來りぬ、

や、或は綠陰影清く涼風絶わさる所、籐榻に晏
臥して古人を友とす此れ亦奇ならずとせむや、
嗚呼終に夏は來れり。

出征軍人を送る

吾人に夏の殊に喜はしきは何故ぞ、今や旬日な
らずして夏季休暇は來らんとす、笈を遠くに負
ひて親に背くこと久しきものは急ぎ歸りて自ら
箒掃の勞をとり、兄弟と昔を語りて共に慈親に
事ふ何物の快か此に加かん、或は短褐輕鞋飄然
として山河を跋涉し古英雄か墓の塵を拂らひ、
古戰場を尋ねて昔を忍ぶもまた妙ならざらむ

悪む可き哉戦! 道德より之を見る、恐る可き
罪惡也、政治より之を見る、恐る可き害毒也、
經濟より之を見る、恐る可き損耗也。然るに極
東は此惡む可き戦を見ざる可からざりし乎。吾
人唯これを悲む。

軍國の表面は頗る立派也、一と度其裏面に想
ひ到らむか、吾人遂に辭無き也。

古人曰く人各能あり不能ありと、農といはず商
といはず將た又工といはず、各々其能を得むとす

るや一にして、若し夫れ之を得ざらむか、其廢滅す。噫、田園將に荒れむとし、妻子飢に堪へさや遠く待つを要せざる可し。我今兵戎を啓きて既に三月を閲し、韓山の敵を拂ひ遼東の嶮將に我に歸せむとす。而してこれが攻戰の難局に當るは、實に能を捨て不能に就くを餘儀なくせられたる者、筆を投じて戎軒を事とする、豈に往時に於てのみならむや。就中最も憫む可き者は誰、下層知る無きの徒とす。見よ彼は戰の經過が如何なりしかを知らざる也。戰の結果が如何なる可きかを知らざる也、唯愛國の念に驅られて萬事を不問に歸し、事に兵戎に服する者、其情真に愛す可し。然れども彼亦木石に非ず。晨を侵して荒穢を理し、月を帯び鋤を荷うて歸り去れる、彼が田園や將に荒れむとす。暮鐘響き去つて星斗囁き、破窓風を通して燈火細く、濁酒を温めて彼を慰めたる妻、罪なき物語に疲れて膝に眠れる兒、彼等や飢に泣いて涙將に涸れむと

す。噫、田園將に荒れむとし、妻子飢に堪へさや遠く待つを要せざる可し。我今兵戎を啓きて既に三月を閲し、韓山の敵を拂ひ遼東の嶮將に我に歸せむとす。而してこれが攻戰の難局に當るは、實に能を捨て不能に就くを餘儀なくせられたる者、筆を投じて戎軒を事とする、豈に往時に於てのみならむや。就中最も憫む可き者は誰、下層知る無きの徒とす。見よ彼は戰の經過が如何なりしかを知らざる也。戰の結果が如何なる可きかを知らざる也、唯愛國の念に驅られて萬事を不問に歸し、事に兵戎に服する者、其情真に愛す可し。然れども彼亦木石に非ず。晨を侵して荒穢を理し、月を帯び鋤を荷うて歸り去れる、彼が田園や將に荒れむとす。暮鐘響き去つて星斗囁き、破窓風を通して燈火細く、濁酒を温めて彼を慰めたる妻、罪なき物語に疲れて膝に眠れる兒、彼等や飢に泣いて涙將に涸れむと

裡窃に龍子を以てたる吾人のあるあり。

五月廿八日夜、聊か出征士の行を壯にせむと欲して、我報國義會員一同、隊を整へ征露の歌を唱へつゝ、提灯行列を舉行す。熱誠の充溢、規律の嚴正、出征の士を慰め得たるを信す。

征露の歌

蒼溟千里海鳴りて、 弦月の影沈むまき、
 鯨鯢吼えて波白ろく、 見よすさまじの黒雲は、
 東亞細亞の空に湧く。
 れどろくさかき亂れ、 蔽へる暗はいや深し、
 風塵むせぶ韓山に、 北滿洲の野を見れば、
 戰聲 空に響あり。
 劍戟の音絶えずして、 滿清の民飢に泣く、
 風 腥 き 遼 東 は、 十年のむかしわが友の、
 血汐灑きし跡なるぞ。
 其血汐だに乾かざる、 還附の恨み盡きざるに、

其の要害に利を占めて、 傲然われに誇るまは、
 咄兇暴の スラッ 族。
 口に平和を唱へつゝ、 天を偽はり世を亂し、
 なほ文明の名を汚す、 かれ殘虐の民見れば、
 誰か義憤のなからめや。

見よコサツクの劍戟に、 平和の光血に曇り、
 正義は地に落ちむとす、 無道の賊を斬らすむば、
 わが世は、永久に闇ならむ、
 罪なき犠牲の血をすゝる、 咽 乾ける 豺狼に、
 人道を説かむは本意ならず、 かの暴戾を拂はむば、
 たゞ 神州の劍のみ。
 義憤の叫血に燃えて、 正義かがやく旗の色、
 殺氣四海に溢れては、 世に惡逆の名も高き、
 北虜痛手に憐む見よ。
 あゝ東海の君子國、 武勇の民のふりかたす、
 日本刀の太刀風に、 平和を阻ふ魔を斬て、
 世の妖雲を打拂へ。

磯田教授吉崎助教
若林會計掛を送る

朝暎海波を蹴つて登る所、大島小嶼千里に列る、美なる哉瑞穂洲、國建てしより二千年、正義の心を養ふ一日の如し、老大四百餘州雞林八道、一衣帶水を我と隔つ、輔車相依るは其所、黒龍江岸長白山麓、我豈に胡馬の窺ふを許さむや、

北光直下の雙鷺國、詭譎暴虐以て國是とし、敢て弱邦を苦めて東に南に其疆を擴めむとす、波蘭塞下白骨横はり、黒龍江畔萬鬼哭する、そも幾星霜、

縷ふれば十年の昔、戰血を濺ぎて王師遼東に陣するや、來りて平和を説く者あり、我潔く之を棄つ、焉んぞ知らむ、我に説ける者却つて之を占めむとは、我に説ける者彼を占めたる者、

またこれ虎眼豺目 鄂羅國、神洲の民恨を懷く更に深からざるを得んや、日夜劍を撫して北斗を仰ぐ、

詐謀また譎策、敢て聲言を破棄し、平和を紊る愈甚だし、今にして彼を挫かずんば、東海同文の國或は危かる可く、坤球永遠の平和或は滅し去らむとす可し、果せる哉、天我に賜ふに斧鉞を以てし、神洲の民悉く立つ、平和の劍正義の旗、加ふるに我に正氣の存するあり、何物かよく我前途を妨げ得んや

是時に方り、磯田教授吉崎助教若林會計掛、令を聞いて征途に上らる、吾人爲めに祝せざる可からず、何となれば、戰袍を擧げて萬夫を敵とする、またこれ男子の本懐なれば也、

黄海の波餘りに靜に鴨綠の嶮餘りに脆く、以て三氏の勇を試めすに足らざりき、然れども黒水の源白山の下、もとこれ蒙古大汗の起り滿州

帝王の立ちし所、曠野天に連り兵を行るに好しといふ、聊か以て三氏の舞臺とするに足らむ、懸軍萬里幾年を経べきやを知らず、希くは健在なれ、別に臨みて更に「寄語征人莫顧慮、後繼有人五千萬」、

吐月峯 (續)

○戦争が始まつて以來、至る處勤儉貯蓄勵行が流行する様になつた迄はよいが、愛知縣では御役場の検印の無い下駄衣服は用ふべからずといふ頗る滑稽なれ觸れが出たといふことだ、又某縣では婦女子唯一の髪の毛を切つて奉納し奉るべしといふ様なお達が出た、も一つ面白いのは、富山市で午砲を廢し、町々の大電燈を止めたことだ、以上の國々では一同揃つて商賣を止めて輜重係に出るといふ、極端も此邊までやれば澤山だらう。

○四月廿四日の本校の端艇競漕會に、豫め揭示してあるに係らず、殆んど三分之一は缺席、代理等で、來賓に配布した活版摺りの番組は、有名無實、完全せる組は一つもなかつた、之は單に番組係を煩はすのみならず、競技者の無責任を示すものである、其位ならば始めより申出さぬが互の爲めなり、競技を遅らかりし、公衆を欺き、當局者を無用の事に使役せさす等、甚だ不徳の仕業といふべし、來年は改良して欲しきものなり。

○凡そ人の上に立ちて責を一身に引受くる者は兎角些細な事にまで口を出し或は心配するものなり、是れ實に微缺だもあらさらしめんと欲するの餘りに出づるものにして、御尤千萬の事ながら、實際は其身人を牽ゆる材にあらざるを表はすものなり、餘りコセ／＼した揚句往々前後矛盾したることを仕出來すものな

り、五月十四日我時習寮大茶話會に、餘興として尺八と琴との合奏ありとの事故、聞物と思ひ居りしに、或筋よりして琴は女子の玩具にして男子の觸るべからざるものなりとの理由の下に御不認可となりしとして尺八丈け聞きたり、面白き理由もあるものかな、而も其疝氣筋イヤ或筋の方々は常に舶來の運動を賤しめ劔道柔道を唯一の運動と心得させらるゝ方々なり、如何にも精神的運動として他に勝ればこそ重き道具を着け、疊の塵も吸込みつゝ右風な運動もやれ、他の運動と甲乙あるは其精神のと云ふ点計りなり、然らば音樂に於ても外形上女子の用具といへども之を精神的に餘興として來賓を樂ましめんと欲して用ふるに何の不都合あらんや、運動は精神的を取り他は外形上人の噂に上らぬ物計り取るといふは

近頃滑稽といふへし、洒落て云へば餘興平たく云へば隠し藝、之にまで外形上精神上の御干涉とは東京の警視廳と好一對のホットン大將といふべし、

○近頃舶來の唱歌が大流行を極めて來たが歌も知らず音樂的聽覺も肥えて居ない連中にはイヤハヤ湯の中の何か見たいにブク／＼云ふ丈けで更に興味がない、好し單調でも日本樂の方がまだ／＼面白い(樂器はその長を採る)前項の或る筋の方々は、六段より、ブツ／＼ワウ／＼プス／＼プーの方が御好きと見え

る。○一般の人、殊に中年以上の人々は運動といふものを如何なるものと思つて居らるゝのか薩張り分らぬ、吾々若い連中は趣味のない運動に効能が無いといふことを知つて、身体相應ふ運動でなければ駄目なとも知つて居る故、無

味乾燥なる体操等は單に規律修養として用ひる計りである、然るに前記の人々は甲に向つても乙に向つても丙丁戊己に向つても、趣味が有らうが無からうが羸弱だらうが強壯だらうが、ヤレ庭球は小供らしい、ソレ野球は亂暴だと一概にクサすが之は他人の趣味嗜好に立入つたことで外部からの干渉では如何ともする事が出来ぬものだ、例へば人參の嫌な人に之を喰へば藥になるといつて喰はせたり、胃腸の弱い人に堅いものを與ふる類で却て大害を及ぼす基である、サンダウの体育法で成功したものは五十人に一人か百人に一人だらう、残りの者は或は肋膜炎或は肺炎等になつたものもある、大に鑑むべきとである、

あるは大に恥づべし、但し 兩陛下の御眞影に對して君が代を歌ふ時我寮生が第一に起立したのは如何にも嬉しかつた、所謂デモ紳士などは論の外なり。(好子)

所謂不平家に示す

高き哉蒼穹、廣き哉黃輿、山陵河海之れが文をなし、花香鳥歌之れに點綴す、蜚蜚の生を亭けて此間に蠢爾たる者、之れ人間にあらずや、如何にして將た何か爲めに、人は此世に生れ來りしや、吾人之を知らざる也、然りと雖も、既に此處に呼吸し此處に運動す、何等かの慾望を懷きて、常に之れが満足を求めむと努むる者なるを疑はず、

金鳥東山に登り玉兔西海に没する、千秋一日の如く、潺湲の水の以て渴を醫す可き、香美の菓の以て饑を癒す可き、隨處あらざるなし、幸

○福助座の大坂博愛社慈善音樂會に外國人が禮服を着て往つたのは流石に國柄だけ恐れ入つたものなり、本校の生徒で着流で往つた向も

るを疑はず、

ならずや、世や人や、然れども一と度寒暑時に
 適はず、風雨度に順はざらむか、起り來るもの
 は、濁流の汎濫、苦實の腐爛、世や壞れ人や亡
 びずむば幸也、是に於てか勢ひ人は、自然の暴
 力を禦がむとす、雷に之を防ぎ得るのみにては
 未だし、進んで自然の狂力を利用せずんばある
 可からず、然り之れ亦人性自然の勢なるを奈何、
 而して斯の如きは獨り物界の事のみ、更に人の
 心界を窺はむか、物界現象の靜動は人の思想を
 壓して、眼を心界の討究に専らならしむ、人の
 苦惱も是に於ては其極に達す可し、然れども天
 と地との高と大とは、物心兩界の無限を最も恰
 好に代表するものにして、斯かる無限斯かる絶
 對の中、人の慾求や大に、希望や高し、區々た
 る五尺の身を以て之れが満足を得むと欲す、ま
 た難い哉、あゝ難い哉、満足を得むと欲するも
 得べからず、欲求の更に熾ならむとするあるの
 み、不平といふものは是に於てか生づ、
 單に不平といはゞ甚た惡むべからむ、然れど
 も不平とは畢竟進歩の動機也、人は望む得ず、
 不平あり、不平ありて更に一般の進歩を促し、
 初めに望む所を得べし、若し夫れ不平ある可き
 世にして不平なからむか、進歩の跡何處にか尋
 ねむ、之を尋ぬ可からざらむか、幸福の影何處
 にか索めむ、人の慾といひ望といふも、詮する
 所幸福の一事にあらずや、是に於てか知る、不
 平は人生究竟の目的に登る可き階段たるを、
 斯く言ばゞ、不平や大に喜ぶ可く、人や須く
 不平の兒たる可きが如し、然れども是に一言を
 要するは、不平に二様の別ある事也、私を中心
 とせるものこれ其の一、公を中心とせるものこ
 れ其の二、人は生れて社會に交はる、其一舉手
 一投足全く其影響を社會に及ぼす可く、己れは
 また社會の力によりて、偏に其生を保ち得とす

れば、則ち人は己れの行爲の對象として社會を
 採らざる可からざる也、故に其の望其の慾従つ
 て其の不平といふものも、社會の爲めにせざる
 可からざる可し、然れども人は絶對に社會に隸
 屬したる者也といふにあらず、人は社會に屬す
 ると共に、また個人としての行動範圍をも有す
 るを以て、其限界を超わざる以上は、個人とし
 ての望あり慾あり従つてまた不平あるを妨げざ
 るや論なきも、私を中心とせる不平が其疆を越
 わて、社會に少なからぬ迷惑を感せしむるが如
 きは、斷して不可也、世に斯かる徒少なからず、
 然れども彼等は適々己が度量の小を表白するの
 みにして、却つて憐む可きも、彼の公の假面の
 下に私の不平を滿たさむとする卑劣の徒に至り
 ては、當に劍を以て其頭上に擬す可き也、黄金
 の力よく有らゆるものを支配し得べくなりし當
 今、此の徒の其力を逞うするを見る、勢止むを
 得ざる可しと雖も、天を仰いで長大息す可きに
 あらずや、否、長大息は未だし、速に之を一掃
 し盡す可き也、
 私を中心とせる不平は不可也、私を中心とせ
 る不平の公の假面を被りたるものは、更に不可
 也、否之を一掃し盡せとは、予か述べたる所な
 れども、之を以て直に予を、公を中心とせるも
 のには絶對に其價値を認むる者也といふ勿れ、
 公の假面の下に私の不平を滿さむとする徒の多
 き半面に、眞に公の爲めに不平なる徒の多きは、
 幾分か社會の爲め賀す可きが如きも、彼等公の
 不平者といへども唯喧々擾々、恰も蒼蠅の如き
 に至りては、聊か憾なき能はざる也、
 不平は進歩の動機也、然り單に動機のみ、若
 し夫れ此動機を捉へて活用する者なからむか、
 進歩や如何にして起り來る可き、世の公を中心
 とする不平家が、常に社會に眼を注ぎて、自ら

其進歩の動機となるは誠に諒とす可し、然れども單に之を口にするのみに止らば、何等社會に益する所無かる可し、世人は物質界精神界の各方面に於て、満足す可きものを求めむとするも能はざると共に、單に聲のみ大にして其實を有せざる不平の擾々たるに、堪ふる能はざらむとす、今日要むる所は不平にあらず、唯それ實行のみ、

然り要する所は唯それ實行のみ、然れども不平なくんば實行なく、實行なくんば進歩なし、畢竟不平が進歩の動機たるは疑ふ可からざるも、實行をして不平に伴はしむるを要する也、是に於てか曰く、人よ、物質界といはず精神界といはず、汝が行きて不平なる可き餘地は到る所に存せざる無し、行いて其餘地を開拓せよ、而して大に不平なれ、飽迄不平なれ、然れども人よ、不平をして單に不平として終らしむる勿

れ、必ず之を實行に表はせ、かくて初めて汝は社會に進歩を齎し得べき也、 (朔風)

無駄口集

○自由なくんば生活なげん、束縛を受けて生活せば如何にして人間の天職を盡す事を得んや、又盡したるに非ざるなり、人各々能あり不能あり、能はざるを以て強ゆるも到底能はず、趣味異り嗜好異れば己が理想の規矩に他を入れんとするも之又能はざるなり、然るに世に往々己が好きを以て人に振舞ひ強いて之を行はしめんとする者あり、理に悖れる甚しと云ふべし、かゝる輩には宜しく斷然たる決心を以て反抗すべきなり、何となれば之れ自己が天職を全うせんが爲めなればなり。

○今年の花見に關し説をなす者あり、一に曰く「この時局に際し閑々として花に狂う可らず」

ト、二に曰く、「戦争のため花見を廢する如きは大國民の態度に非ず、宜しく之を盛にして我國人の戦争にのみ醒醒たらざるを示すべし」ト、然して三に曰く、「白晝綺羅を飾りて觀櫻するはいさゝか、世間に耻づる所あれば宜しく夜櫻を賞すべきなり」ト、何れ是にして何れ非なるか、我れ是を知らずと雖も第三説最も實際に表れたる如し。

○某學校に一泊行軍の舉あり、体操科教官不參者に告げて曰く、「諸君は行軍不參が如何に成績に影響するかを知るなるべし、豫め之を告ぐ」ト、不參者を侮辱したるの甚しきものと云ふべきなり、然もこの威嚇露西亞の囑喝と甚だ相似たるに非ずや、僕又不參者の一人、この教官の言を聞て益不參の念を強めたり。○暑中休暇は學生精神脩養の好時期なりと、知らず脩養か墮落かを。

○事古りたれど一青年投溲して死す、あゝ短氣をやつてのけたり、由來短氣は損氣、長壽を保ちて研究を怠らざれば不可解は可解となりしかも斗る可らざりしなり、自己が實力を顧ざる皆この末路を反覆すべし、慎むべきなり。○圖書館に太陽を見る、挿入する寫真板一枚毎に「高等學校圖書印」の印あり、誰か之を見て盾を擲めざる、我校學生心裡の汚醜かくの如きか噫。

○試験場に臨みて胸に早鐘的なるあり、沈着事に當るあり、前者の準備薄き后者の厚き固よりなり、然して前者は問題の易からん事を願ひ后者はその難きを求む、元より一は笑うべく他は賞すべし、然れども余はこの沈着家、求難家に疑なき能はず、彼等は實力ある者の常として難問題を欲するなるか、あらず、只功名心に驅られたるの結果にして是は尙恕す

べきも若しそれ他の不出來を希うためなるが如くんば心事の陋劣面に唾して可なり。

○齋藤綠雨その死去を新聞紙上に廣告するに當り己が名を以てせりと、日本人の常識に欠けたるを證する好適例と云ふべし。

○我れ胃病に苦む、菓子御蔭なるか、我れ既に學生か品性を損せん事を恐れて禁酒令を布けり、教育の眞意義徳育並び行ふものなるべき以上は宜しく禁菓令を布て胃病の豫防をなして可也。

○擊劔衰へ、柔術又盛ならず、今やテニス万能時代なり、次に來るものはそれピンポン、自轉車、玉突か。

○聽衆の辯者より少き演説會は第四高等學校に於て初めて見たり 是れ何の結果にして又何の元因となるべきか、當局者一考して可なり。

○村に事なかれ主義は我校の特色也、實に不平

のみ喋々して實行に着手せざる我れ半千の健兒、省みて愧赧する所あらざるか、だと云ふて僕も又その御仲間かも知れぬ。(また)

第二回三縣聯合庭球大會

報告

時は四月十七日、韶光の春も半ば暮れ、大方の妖花褪せて凋落地に埋れし淺みどり野の面を彩るとき本會は開かれたり。此の技に加けるもの何れも精の精、粹の粹ならざるはなく轉だオリンピア祭の古ぞ忍ばるゝ。實にや一朶の紫光金光はつと亂れて天の一方に閃けば碧血迸つて地上に聲ある活劇は演せられたりき。いで其の勝敗を遠き記念に認めん

- 高 中 村 正
- 高 柳 沼 廉 三
- 高 山 崎 亮 五 郎
- 高 木 田 芳 三 郎
- 高 川 上 朝 吉
- 高 砂 谷 智 導
- 高 大 和 田 信 吉
- 高 青 麻 永 明
- 高 小 和 田 嘉 一
- 高 淺 見 喜 平
- 高 赤 松 裕 一

- 高 伊 藤 靜 雄
- 高 八 田 善 之 進
- 高 板 垣 贊 造
- 高 神 保 金 衛
- 高 市 村 先 生
- 高 上 原 先 生
- 高 松 井 三 郎
- 高 山 中 勝 次 郎
- 高 大 間 知 昌 太 郎
- 高 有 村 慎 之 助
- 高 八 木 治 太 郎
- 高 久 我 龜
- 高 水 上 純 一
- 高 伊 藤 郁 太 郎
- 高 南 文 友
- 高 太 田 久 作
- 高 小 泉 安 太 郎
- 高 藤 岡 清 行
- 高 吉 田 盛 治
- 高 大 河 内 忠 三
- 高 藤 加 藤 直 吉
- 高 芝 原 勇 吉
- 高 池 野 清 正
- 高 竹 田 先 生
- 高 西 田 先 生
- 高 高 橋 紋 三
- 高 武 中 吉 川

- 高 水 野 重 智 功
- 高 岡 田 武 夫 信
- 高 八 井 波 先 生
- 高 永 井 波 先 生
- 高 川 上 朝 澤 吉 智
- 高 白 上 祐 吉
- 高 笹 井 幸 次 郎
- 高 國 嶺 專 益 吉
- 高 藤 原 治 三 郎
- 高 鷹 見 義 郎
- 高 越 中 吉 川 清 彌
- 高 山 田 甚 吉
- 高 小 野 徹 一 昭
- 高 金 子 善 一
- 高 富 田 幸 太 郎
- 高 渡 邊 嘉 一 郎
- 高 笠 原 由 太 夫
- 高 加 藤 虎 之 助
- 高 本 間 先 生
- 高 藤 田 圭 太 郎

- 高 長 村 吉 太
- 高 池 田 茂 太
- 高 加 木 宗 朔
- 高 水 兵 太 郎
- 高 北 川 博 政 一
- 高 辻 川 義 政
- 高 矢 口 長 三
- 高 京 谷 正 次
- 高 今 井 七 兵 衛
- 高 長 村 吉 太
- 高 西 出 源 次 雄
- 高 村 田 善 吉
- 高 越 田 喜 一 郎
- 高 清 水 宇 吉 雄
- 高 松 木 勝 吉
- 高 白 松 慶 敏
- 高 藤 田 彦 六
- 高 高 橋 好 次 郎
- 高 加 藤 周 造
- 高 堀 五 十 嵐 將 二
- 高 村 井 又 三 郎
- 高 伊 藤 嘉 秋 郎
- 高 牛 島 敬 三 次
- 高 筒 井 金 三 次
- 高 宮 田 康 三 政
- 高 增 山 茂 政

- 高 阿 村 真 平 亮
- 高 大 井 守 一
- 高 白 崎 重 治
- 高 浦 井 肆 四 郎
- 高 中 谷 三 郎
- 高 鈴 木 自 老
- 高 木 村 自 老
- 高 田 原 吉 右 衛 門
- 高 中 川 竹 次 郎
- 高 常 安 田 幸 清
- 高 小 川 聖 二 治
- 高 水 本 善 太 郎
- 高 岡 本 善 治
- 高 吉 田 富 彦 治
- 高 塚 本 富 彦 治
- 高 川 口 友 次 郎
- 高 小 澤 省 次 郎
- 高 山 田 善 太 郎
- 高 悅 永 周 藏
- 高 山 本 孝 吉
- 高 足 立 本 孝 吉
- 高 山 下 潤 克 藏
- 高 湯 淺 啓 一
- 高 今 井 七 兵 衛

二中 鳴正造	高小 川信二	石川縣第二中學校	八	四	四
福師 多田榮太郎	富師 林野坂彌與助	石川縣師範學校	一四	二	二二
二中 藤田彦六	石師 萩村三藏	石川縣工業學校	六	二	四
富師 藤鳴先生	富師 矢野富次郎	醫學專門學校	二一	一三	八
高 清水徳太郎	一中 小野友也	第四高等學校	三六	二〇	一六
石師 上野小二郎	福中 前田圭助				
富師 籠宗清	高 增田雷助				
高 志田保二	高 東郷外伍人				
高 千代嘉一朗	福師 齋藤俊夫				
高 伊香志朗	高 浦井鏗三				
高 河原繁	高 衣斐清香				
宮所 富太郎					

對他學校勝負比較

(同校者ノ勝負ハ除ク)

富山縣中學校	出競者	勝者	敗者
富山縣師範學校	四	二	二
福井縣福井中學校	一八	一〇	八
福井縣武生中學校	二	〇	〇
福井縣師範學校	四	〇	二
石川縣第一中學校	六	六	〇

嗚呼我校の庭球道も此處に盛大の極に達したりと云つべし白雪暖風に消ゆる絶間にも降りしき五月雨の晴間にも尙校庭にラケットの響聞へざる時なく三百の健兒コートに少なきに不平を洩し空しく庭側に佇み他のミステークをカウントするの己むを得ざる境遇に在て然かも孜々として斯道に熱心琢磨す豈快ならずや。二三の士の曰く那れ婦女のハイカラ的遊戯にして堂々たる男兒の彼等輩の擧に倣ふべきものならずと何ぞ其言正を失したるの甚しき、彼等は此技の何たるを知らざる者なり柔道よけん、劍道よけん、野球よけん、ポートよけん、然れども庭球の技に於ても其力量と判斷力とを要する事決して他技

と優劣なく一朝にして不可を遊ぶ事能はんや。見よ一個の球を掌中に弄び、鋒先を齊へて竹葦の隙も出さず、きりつめさしつめ熱球魔球頻々受けつ流しつ敵壘に迫れば敵又何條の事やあると妙術を盡して之に應じ更に一撃は一撃と激しく一合は一合と酣に電光石火進む事は飛鳥の如く退く事は脱兔の如く然かも瞬間に往行する考察力は其勢を逞しくして互に敵の虚を突く愉快さよ之れ實に門外漢の窺ひ知る處に非ず陣頭に立つに及んで始めて心神修練上如何に有益なるかを知るなり。諸氏!!奮て層一層にコートを賑かせ、然れども前述の如く斯道は活動的のものなれば我校にては多少の事情あるにもせよ單に此活潑なる技を亂投にて満足せしめず常にゲームを行ふ事なり斯く云はゞ只に勝敗のみを念頭に懸くと思はるべけれど左ならず勝敗元より天運地利に屬すと雖ども平時の修養即ゲー

ムの勝手、手具合之れ大にいざ鎌倉の場合を左右す。試に今回の勝負を見よ我校の成績三十六に對する二十の勝者を出す實に好結果なり然れども其勝者は二流三流の士に多くして比較的技の正確なる第一流のチャンピオンは委く敗に歸す之れ偶然の結果に非ず故に余は盛にゲームを奨励し且つ諸氏の反省を促すに切なるものなり

弓術部大會

新緑の風香しき五月廿二日を以て春季大會は無聲堂場に催されぬ時未だ到らざるに陸續來集する部員は皆適ばれの骨柄鉄條腕中に潜むてふ怪力鎮西爲朝にも劣るまじき強の者にて心直而矢直の原則の化身とも云ふべきか又一つの長袖緩帶の懦弱者を見ず蓋し指導者の常に品性に重を置き且つ体育を忽にせざる反應ならむ北辰校の前途夫れ多望なるかな應て數番の禮射あり、之

れ部員の最も重を置く所にして又他と大に其性格を異にする所以なり威儀堂々古式に則り怯せず動せず能く其禮を守り舊幕の老友も爲めに嘸然たり本校生の点取競射終りて休憩時餘後各學校撰手の競射に移る、射手は何れも皆各校の粹絃の音高く切つて放つ矢は貫岩の勢を以て悉くの中し何れをそれとも分け兼ねたり折しも雨さへ加はり殺氣天に満ち意氣頓にあがる嗚呼天下の覇はそも誰の手に歸せむ來賓職員競射、紅白競射、金的競射順を追ふて進み薄暮閉會す當日の受賞者左の如し(來ハ來賓、職ハ職員、醫ハ醫學專門校、一中ハ石川縣第一中學校、高ハ本校なり)

- 五等賞 柳沼廣三
- 六等賞 衣斐清香
- 七等賞 關格之助

各學校撰手点取競射

- 一等賞 (一中) 楠 正 路
- 二等賞 (醫) 秋山八百藏
- 三等賞 (高) 橋本四郎
- 四等賞 (醫) 谷 道 秀
- 五等賞 (醫) 佐々木辰實
- 六等賞 (高) 衣斐清香
- 七等賞 (醫) 笹田順三

本校生五手競射

- 一等賞 衣斐清香
- 二等賞 橋本四郎
- 三等賞 柳沼廣三

本校生点取競射

- 一等賞 内田 稜
- 二等賞 神谷吉兵衛
- 三等賞 橋本四郎
- 四等賞 生井 洗

來賓職員点取競射

- 一等賞 (來) 吉 田
- 二等賞 (職) 楠 口
- 三等賞 (來) 關 口

寮 報

時習寮第三學期大茶話會

記事

鳥兔匆々洗として一夢の如し前に入寮宣誓式を行ひたる尙眼前に髣髴たり然も今や吾人は卒業生送別會を兼て本學年最終の大茶話會を舉行せざる可からざるの時に際會せり

時維五月十五日細雨蕭々として降る天何をか感得せる、午后五時卅分號鐘三点來賓校長以下職員寮生相共に食堂に卓を圍む大牢八珍の美味なしと雖も和氣霽々として心自ら暢ぶ、次で移つて無聲堂に至る本會々場なり正面「蘭飛馨」の大

- 四等賞 (來) 佐々木
- 五等賞 (來) 久 田
- 金的競射 (醫) 淺田孝三
- 受賞者

額を掲ぐ筆力雄勁其壯大と共に未曾有と稱す可し會場四邊繞らすに紫紅の幔幕飾るに各國々旗を以てす壇上挿む所の松樹亭々として翠綠滴らむとす滿目徒らに技巧を弄せずと雖も自然にして純撲剛健の体を備ふ時習寮生の意氣亦想見す可しやがて六時卅分諸先生以下席定まるや川村寮委員起て開會の辞を述べ

是れより卒業生諸君の送別を兼ねまして第三學期大茶話會を開會致します、本年は實に我膨脹寮の第一次年でありまして今後の施設に關して非常に緊要なるものがありました幸に職員諸先生の勵精と寮生諸君の協同和衷の精神によりまして茲に今日に至りましたのは委員の偏に感謝する次第であります、此時に當りまして吾人は大に又卒業生諸君に負ふ所あるを自覺しなくてはなりません諸君の内には或は本校入學以來一日の如く寮務に盡瘁せら

の木鐸を以て任せられまして如何なる場合に
際しても。よく其處するの道を誤られざらん
事を繰返して置きます云々

八波教授次で登壇卒業生の爲めに殊に新体詩希
望編を吟せらる一堂静寂音吐朗々、清水君卒業
生総代として簡明直截なる一場の答辞を述べ、
次で壇上英姿颯爽の壯漢を見る議論縦横生氣横
溢舌端風を生ず是れ小山君の氣を吐けるなり、
此時己に九時即ち茶菓を頒つ、暫くにして嘸曉
たる音樂につれて合唱せられしもの新に作る所
の送卒業生歌とす

界云々と呼ぶ場内騒然直ちに又沈靜に復す是れ
全寮合同大規模の喜戯なり一醫者によりて望む
所に趣くを得るてふ秘藥を獲て之を晤め二人の
壯者幽冥界に彷徨して種々の故人と珍奇なる光
景とに遭逢するを演出したるものなり、明煌々
たる屋内の一瞬にして黒暗々となり遠く幽かに
朦朧たる火光の内白衣の亡者をもとめたる三途
の川の眞に逼れる各種の人物の活躍せる觀者其
現境に臨むが如し然も其間斷せず交ふるに興味
津々たる輕妙の會話を以てし人の頤を解かしめ
たり

是れより會は余興に入りて卒業生諸君の蓄音器
に初まる着想奇抜にして規畫精妙出づる所千差
萬別端睨す可からず拍手堂を動かす、夫れより
尺八の吹奏あり妙音何の辭を以てか之を寫すを
得ん梁上の塵果して舞ひしや否やを知らずと雖
も心恍惚として酔へるが如し、忽ち人あり幽冥

終れば十一時なり根津寮委員及ち起て閉會を告
げ豪壯なる寮歌の合唱を殿とし高く 陛下万歳、
第四高等學校万歳、時習寮万歳、卒業生諸君万
歳を呼んで散會す
此日會するもの二百五十有余人第七高等學校生
徒監偶々當地にありて亦來賓中にあり

吾が大茶話會は斯くして莊嚴に盛大に又清趣の
極致を尽して了りぬ是より吾人は互に袂を分た
ざる可からざるか、今宵遊子の夢果して何れの
處にか飛ぶ。

衛生講話

五月某日本學年最終の講話會を開いた時金澤醫
學專門學校教授上田計二先生は校務多忙の中よ
り特に我寮生の爲めに一席の講話を快諾せられ
たのは一同感謝に堪ねぬ次第である、左に記す
のは其講話の概要である

人躰は解剖學上細胞と稱する小形の袋から出來
てゐて此細胞が幾千萬となく集合してオルガン
を造るのである、肺臟心臟腸胃眼耳手足等は即ち
オルガンで此オルガンが幾個か集合して人躰を
成すのである、人躰の元素なる細胞は之を化學
上から言へば蛋白躰である而して此蛋白質は實

に人躰の主成分である、身躰が成長する爲め且
つは日々の仕事によりて破損し去る所の細胞を
補充する爲めには蛋白躰は必要缺く可からざる
物である、蛋白躰で出來上つた人躰を働かす爲
めには、恰も蒸氣機關に石炭が必要なる如く、
矢張熱を起すものが必要であつて人躰が要する
石炭は含水炭素と脂肪とである、含水炭素脂肪
は其分子中に張力とも言ふ可き潜勢力があつ
て、呼吸作用により躰内に生理學上の所謂動物
的燃焼が起り此燃焼により破壊して分子中から
かの張力が發展して躰温或は筋力と變化するの
である、要之人躰を健全にし自由に活動させる
には、構成材料として蛋白躰と躰温や作業をな
す可き材料として含水炭素及脂肪との三つが必
要である、故に若し吾々が食物を採るに際し含
水炭素或は脂肪のみを擇び蛋白躰を採らずさな
くとも之を採ると少量に過ぐる時は日々消耗す

る細胞を補充することが出来ず従つて躰は衰弱する、又含水炭素と脂肪とは躰内に於ては殆ど同一の作用をなせども矢張各其特長があるから含水炭素を顧みず脂肪のみを採れば矢張健康に害する、しかし含水炭素の外に適量の蛋白質を採れば脂肪は採らぬとも差闘はない、就ては如何なる食物を採つたならば健康上好良であるかを知らぬばならぬ、肉類は牛馬羊豚鴨鶏魚類貝類の肉は大抵同一の滋養力を有してゐて大量の蛋白質と多少の脂肪とを含有してゐる然し含水炭素は含んでゐない、百分中九十六七迄は消化せられるから蛋白質を取るには最も適當するが高價なのが少しく申分である、肉類の新鮮なのは硬く且ますいから鳥獸肉ならば屠殺後二日魚類ならば一日の後には味ふがよい、肉類は調理の善悪で味の好悪消化の良不良が出来るは勿論であるが高價のもの美味なものが必ずしも滋養に

なるとは限らない味の好悪をいふのも咽元三寸であるといふことを記憶してもらひたい、鳥卵は普通に雞のを用ゐるが家鴨のも同一の滋養分を有してゐる、凡て卵は蛋白質が主であつて含水炭素は含んでゐないが脂肪は十分ある故消化のよいことも肉類に劣らぬ、卵は生のまゝで差闘ないが攝氏七十度の熱で半熟にすれば一層よい然し玉子焼のやうに焼き過ぎては蛋白質の性質が變るから爾後須くオムレツ風に改良すべし、乳は牛乳馬乳山羊乳いづれも効能に變りはないたゞ山羊乳は味もよく滋養分も最も多い、乳だけでも人躰は優に支へることは出来るが大人の胃は固形食物に慣れてゐるから乳ばかりを用ゐては絶えず空腹を訴へねばならぬ、健康躰の動物から搾取した乳は其まゝ飲用しても差闘へぬが動物にも病に侵されてゐるのも澤山あり殊に日本本の牛の大半は肺結核に罹つてゐるから此等か

ら搾取して乳は結核菌を混してゐる故飲用の際は十分煮沸して用ゐねばならぬ市中の殺菌牛乳といふてゐるものは八十度の熱で一時間煮沸するか或は蒸氣で蒸してゐるが十分殺菌することゝは困難と思ふから使用の際更に煮沸するだけの手数は必要と信ずる、乳ハ飼料の如何によつて其滋養券が増減するもので乳の良否は脂肪の多少によつて直接に判断する事が出来る乳の良否を極めて簡単に知るには乳汁比重計で其比重を計ればよい善良の乳は一・二七乃至一・三四の比重を有してゐる、こゝで諸君に相談がある、それは別の事でもないが諸君が自ら牛を飼養するといふ事である、諸君が毎日一合乃至二合の牛乳を牛乳屋から取つてゐるるが市中の牛乳屋のは其質に於て果して善良なるものかどうか又其價額に於て果して相當であるかどうかと調べて見たに雙方ともに餘り面白くない質の餘り好良

でないとは申す迄もないが其價格一合四錢とあるがよく調べて見たに牛の飼養料全躰瓶の破損費配達人賃金等全てを計算して一合代四錢の中から差引いて見ると約一錢半といふものは何者の懐中を肥してゐるのである、だからこゝで二百人近くゐる諸君が毎月少量の金錢を出して牛を借り牛飼ひを一人雇ひ廣い校庭の一隅の草原を圍つて飼養するにして別に殺菌用の器械を一個備付けたならば、牛乳屋で賣る如何はしい牛乳の原價で優に精良な牛乳を毎日各人一合乃至二合宛飲用する事が出来て實に會計上健康上一舉兩得の策と思ふ、どうか之を實用してもらいたい、麥類は三滋養分を悉く含有してゐるから麥類のみを用ゐても健康を支へることが出来る、たゞ麥粒は消化しにくい硬性の外皮で包まれてゐるから麥粒其のまゝ炊いた所謂麥飯は消化が甚だ悪るいから坐業の人には適當しない

麥は麵麩餛飩或は素麵に製したのが最も食用に適する此種のもは百分中九十九まで消化せられる、又醬油味噌も麥で作るけれども味噌汁を餘りガブ／＼飲むのは爲めになるとは言はれぬ毎朝味噌汁を用ゐても唯衝動用にすれば事が足る、米飯の消化のよいとは麥も肉も到底及ばぬ百分中九十九・五まで消化し去らるゝから米飯全粒が消化せられるといつてもよい、然し米の麥に及ばぬのは蛋白粒が少い点である米だけで八粒に必要な蛋白粒全量を得ようとするには米一升を用ゐねばならぬ之は何如に健康なる諸君も堪ゆるとが出来まいと思ふさらでだに桂月觀月石川屋の華客となつて胃腸を害してゐる諸君はこの一升の米を食はねばならぬとしたら或は諸君の前途や憂ふ可しだらう、だから米は必要の含水炭素を取り得るだけの量例ねば一日三合以内を用ゐる蛋白質は肉卵乳等で補ふとすれ

ば安全である、又粥を常用としてゐる人があると思いたが病氣の爲めなら兎も角却つて益なきと信ずる、豆類は三滋養分を含み特に蛋白粒と脂肪とは甚だ多量で植物性食物中最も滋養に富んでゐる大豆豌豆最もよく小豆菜豆隠元豆は其次に位する、糞豆とするには十分軟くなるまで糞ないと消化によくなく百分中七十だけ消化するに止まる、豆腐は牛乳と同様多量の水を含んでゐて消化するとは乳より悪い然し健康な人には適當は食料である油揚凍豆腐も料理に注意すれば滋養食となるとして豆腐類は廉價であるから大に稱揚す可き食物と思ふ、甘藷と馬鈴薯とは含水炭素を主成分としてゐるが水分を多量に有するのと消化の不良とは大なる缺点である近時甘藷の栽培につれて之を以て米麥に替へやうとするが如きとあつては國民衛生上憂ふべきとである、蘿蔔胡蘿蔔牛蒡胡瓜茄子芹松菜な

どの野菜物は酸類糖分を有してゐるが滋養物とする値はない磷酸鹽類を取る爲めに少しづつ食するの必要であるが餘り多く野菜を食ふのは胃腸を徒勞させるばかりである

さてこれから食物の分量に付て話さう、食物の分量は男女年齢職業氣候等に關係して多少の差は止むを得ぬが大抵の標準としては中等社會の中等業を執つてゐる成年男子体重十五貫匁のものは左の滋養物を毎日取るを要する

蛋白粒 二十五匁 含水炭素(澱粉共)百五匁
脂肪 十二匁

之を体重に比例して見ると各一貫匁に付蛋白粒は一匁七分含水炭素は七匁脂肪は八匁になるとして含量は体重に正比例して増加するのであるから体重の大なる人は其割合に食量も大なる理である、又一日の食量を朝晝夕の三食に配當して見るに

蛋白粒	脂肪	含水炭素
朝 五 匁	二 匁四分	三十五 匁
晝 十 匁	四 匁八分	三十五 匁
夕 十 匁	四 匁八分	三十五 匁

この通りである、朝は食量の少きをよしとす朝から満腹の有様では腸胃の消化に全身の力を専らにしなければならぬから勢ひ氣力を失ひ怠惰に傾かざるを得ない、然し晝は澤山食つて午後に働く分を十分養はねばならぬ、此表の含水炭素の量を三食とも同一量にしたのは我國人の習慣に縦つたのである以上食物の性質並に分量を述べたが前途多望なる諸君に幾分の参考ともなれば幸である(此記事を草するに當り上田先生が嘗て石川縣通俗講談會にて話されたる「家庭衛生に就きて」(石川縣教育會雜誌所載)に據る所多し該誌に謝す)

(寮報終)

附 録

氣愈揚がる。

當日の部署左の如し。

辰ノ口村附近行軍紀事

青帝既に北陸の地に臨み、新鶯は金羽を装ひて林叢に簧舌を啾し、蛺蝶は粉翅を翻して菜花に顛狂す。香骨氷蔬の梅や、碧玉鳳翼の柳や、青帝の心を留めて刻みなせる春の痕は至る處青年の意氣を驕らしめ我が四高の健兒をして弾肉の嘆あらしむるにあらずや。

又時や露ごの干戈あり、幾多の貔貅遠く北亞の野に劔銃を把りて正義の爲めに戦ふ。此折に際し我が四高行軍の擧あり。遠く辰ノ口附近に一夫大戦闘を開かんとす、校中刻る處歡聲湧きしも亦宜ならずや。

四月十一日午后一時、吾校庭に於て大隊の編制あり。隊伍整々として分列式を行ふ。健兒の意

統 監

大隊長

大隊副官

大隊旗手

大隊書記

同

第一中隊長

特務曹長

曹 長

給養掛

第一小隊長

第二分隊長

第三分隊長

第二小隊長

第一分隊長

吉村寅太郎

磯田正謙

千秋 寛

河 原 繁

飯 森 梅 男

山 崎 麓

宮 川 爲 三

井伊谷春平

小西直忠

園田三朗

小 原 時 雄

長沼賢海

下 村 茂

安達勝雅

渡 邊 周

民野雄平

第二分隊長

第三分隊長

第三小隊長

第一分隊長

第二分隊長

第三分隊長

中隊長以下總計百六十五名

第二中隊長

特務曹長

曹 長

給養掛

第一小隊長

第二分隊長

第三分隊長

第四分隊長

第二小隊長

第一分隊長

第二分隊長

第三分隊長

田邊邦平

草間智淨

松橋紋三

溫井亮吉

開發仁十郎

神藤純一郎

吉崎佐次郎

岡田信

一色誠次郎

中野並助

荒木彦弼

岩本秀雄

阿河孝平

大谷勝眞

根津金吾

清水與七郎

高萩 節

矢口長三

吉田孫作

第四分隊長

第三小隊長

第一分隊長

第二分隊長

第三分隊長

第四分隊長

中隊長以下總計百六十九名

第三中隊長

特務曹長

曹 長

給養掛

第一小隊長

第二分隊長

第三分隊長

第四分隊長

第二小隊長

第一分隊長

第二分隊長

第三分隊長

五十嵐平二

飯田庄八

松橋好次郎

衣斐清香

笹岡恭平

櫻井正規

日下庄太郎

淺見起平

井上致也

中村 正

小和田嘉一

田中千吉

白上佐吉

赤松祐之

横田克巳

吉田 一郎

柳澤清易

立松省三

- 第三分隊長 辰巳 英一
- 第四分隊長 鎌形 勝爾
- 第三小隊長 湧井 廉平
- 第一分隊長 石川 汎兵
- 第二分隊長 望月 藏六
- 第三分隊長 西村 健爾
- 第四分隊長 下田 光造
- 中隊長以下總計百五十三名

衛生隊

- 竹多 乙三郎
- 菊池 正三
- 河村 幸一
- 渡邊 信吉

○出發

四月十三日、天晴る、校庭の芳草濃かなる處、健兒既に劔を磨き銃を肩にし、草鞋を踏み鳴しつゝ談笑せり。

八時、靜勝館に於て隊伍編制成り校庭に整列するや。吉村校長、磯田大隊長は馬上豊にまたがり

英姿爽然として出て來らる。隊中の健兒覺せず一齊に拍手して迎ふ。校長諭告する處あり曰く

行軍には必ず行かん覺悟なりしも昨年は素志を果たす能はず。今年は諸子と共に行く事を得て深く満足を感じ。されど家に大病人ありされば辰の口迄は諸子と行を同じうせんも一泊はせて歸らんやも知れず、こは諸子に一言謝し置くなり。

儲此度の發火演習に付きてのみならず從來とも宿泊を要する行軍に就ては其利害如何は職員間に於て種々議論ありしも今年は先づ行ふ事となれり、然かも今年の結果に依り論決せんとする所あらんとせしに今回は意外に多數の出席者あり、こは余の深く満足する所なり。

云ふ迄も無く北陸に於て我が第四高等學校は最高の位置にあり、諸子の一舉一動は皆人の矚目し、他中學は以て己の模範とする所なれ

ば諸子深く考ふる所なかる可からず。殊に今や日露の事あり諸子宜く規律に従ひ幹部の命を守り、苟輕燥なる舉動をなして本校の体面を毀くるが如き事ある可からず。

出發するに當り一言諸子に云ひ置くなり。尋いで磯田大隊長馬を進めつゝ一般の想定を授く、曰く、

○一般の想定

越前より加賀に侵入せる敵は北陸街道を我に向つて行進中なり

我本軍は之れを攻撃せん爲め四月十三日朝金澤を發す

情報に依れば敵は手取川左岸の陣地に據り我を拒止せんとするものゝ如し

午前八時囀曉たる喇叭を先にし翩翩たる校旗を中にし威儀堂々として進軍す。

天晴れ氣清し。鶴來街道に沿ふて金澤の郊外に

出つ。曉雲菜花の上に迷ひ雲雀の影朝輝を帯びて空にあり、門牆の桃李は桑葉にこぼれ園林の新緑は野水に映ず。鏽々たる劔聲に目送する野翁村人、思ふに如何なる感をや懷きし。茅屋を過ぎ小學校を過ぎ、練車の響き鶏犬の聲を耳にし、平和なる田園の春色到る處可なるを見る。午前十一時小柳村に着し午食す。終りて第一中隊第一小隊仮設敵となり先づ發す。小原少隊長之を率ひ若林少尉監督す

大隊命令 四月十三日午前九時
於金澤地黃煎町南端

一 敵は大聖寺方位より北陸街道を北進し手取川左岸の陣地を占領するものゝ如し

我本軍は敵を攻撃するの目的を以て北陸街道を前進中なり

當大隊は鶴來街道を鶴來に向つて前進し宮竹

三ツ口方向に於て敵の右翼を脅威するの任務を有す

兵となる。吉崎中隊長之を率ゆ。午後零時四十分小柳村南端に於て前衛命令下る曰く。

前衛命令四月十三日零時三十分
於小柳村南端

- 二 第一中隊は前衛に任す
- 三 第二、第三、第四(仮想)中隊を以て本隊とす
- 四 衛生隊は本隊の後尾に行季は本隊の後尾後
一 千米突に在つて行進すへし
- 五 予は本隊の先頭に在て行進す

大隊長 磯田正謙

○仮設敵の防禦

- 一 仮設敵の鶴來に着するや、直に市街の入口に監視斥候三人を留め、本隊は手取川を越へ、天狗橋邊に其一部隊を留め、他は川岸の堤後に隊列をなし以て敵軍に備ふ。前には激流滔々たる手取川あり後には一帯の丘陵あり、健兒慘として驕らず、期する所ある者の如し。
- 二 當中隊は前衛に任せらる
- 三 第一小隊を尖兵に任ず
- 四 第二第三小隊を以て前衛本隊とす
- 五 尖兵は即時出發鶴來町より右折し手取川を流り宮竹三ツ口を経て山口村に至るべし
- 六 記號は既定の通り
- 七 予は前衛本隊の先頭に在て行進す

注意

- 一 敵は帽に日覆を附す
- 一 紅旗一本は一ヶ中隊紅白旗一本は一ヶ小隊を標示す
- 一 彈藥は一人十發を使用すべし

○大隊の前進

第二中隊は我大隊の前衛となり其第一小隊に尖

一 棚杖の使用には最も留意すへし

一本日は遠路殊に暑氣加はりしを以て稍々運動に困難なりと雖も平素諸氏の熱心奮勉せしを爰に發揮して十分に其任務を盡されんことを希望す

即發す。斥候既に榮畦を過ぎ野橋を渡り行く

敵を視察しつつ、坦々たる鶴來街道を進みて鶴來に向ふ。月橋村に於て更に斥候を増加し道路の右側手取川に沿へる方面に向はしむ。田敵に鋤を荷へる人なく鳥雀の影寂として殺氣野に滿つ。忽ち聞く寂寥を破る第一の砲聲、蓋し敵の路上斥候と我が斥候と鶴來町端に在りて衝突せしなり。時正に午後一時十五分

敵は悠々として前岸の要害に據り期する所ある如し。見よや龍虎相格すの壯觀是より起らんとするを。

○手取川の激戰

我が尖兵は鶴來町より天狗橋に至る街道の左右に散開し猛烈なる砲撃を始む。更に一分隊は神速なる運動をなして我が尖兵の遙か左方に散開す。前衛本隊たる第二第三小隊亦我が左翼に散開し急射撃を行ふ此時に當りてや敵の二個中隊堤防に據り我に應ず。

野に滿つ。忽ち聞く寂寥を破る第一の砲聲、蓋し敵の路上斥候と我が斥候と鶴來町端に在りて衝突せしなり。時正に午後一時十五分

敵の斥候は見る見る退却す。我が尖兵は街道に密集しつつ前進し手取川に出づ、彼斥候既に天狗橋邊の一軍と合し我を射撃する事頻りなり。我が本隊は陸續として本街道に進軍しつつあり、

我が本隊は陸續として本街道に進軍しつつあり、

激流を動かし壯快云ふ可からず、然かも午后二時を過ぎて猶敵宜く防禦し動かざる事山の如し。此に於てか我軍橋を渡りて突進せんとし本隊の激烈なる一齊射撃と共に第三中隊既に第三小隊

の右翼に散開し、今や敵大に動搖せる機に乗じ、第二中隊の第二小隊第三小隊は橋前の堤防の蔭に集合し我軍の援護射撃の下に縦隊を成して橋に突進す、假想第四中隊之に續く。

見る見る硝煙湧いて黒雲漲り、彈雨注いで電光閃く。橋上の敵軍亦宜く奮闘激戦せしと雖も遂に及ばず漸次退却す我が軍是を追ふ。

敵や此戦に周章狼狽すと雖、猶能く一部隊は燈台笹村の桑圃に散開し味方の退却を援護し以て我軍を喰ひ止めんとす。其意氣や感す可し。即我が軍は第二中隊及假想第四中隊をして應せしむ。戦ふ事僅に四分、敵退却す。

○三ツ口村の激戦

敵既に手取川の戦に敗る、宜しく其恥辱をそぎ能ふ可くんば再び我が大隊を手取川以西に撃退せざる可からず。されば彼が三ツ口村に再び隊列を敷きて我を待つや蓋し深く決する所あり見る。

てなり。宜なるかな、彼軍が堂々たる散兵を桑圃に敷き凜然たる意氣我を呑まんとするあるや。我が斥候の報告に依り敵の情状を知り得たる吉崎中隊長は即第二小隊を散開せしめ他は暫時村内に潜む。

既にして第三小隊は其右翼に第一小隊は其左翼に散開す。殷々たる砲聲頻に敵の膽を寒からしむるも彼亦退かず。

依りて我が本隊たる第三中隊は戦線の左翼に出で次で第一中隊は右翼に假想中隊は中央に増加し一大戦線長蛇の如く延びたり。

激戦數刻、劍聲銃聲鳴り響いて殺氣天に滿つ、然かも敵退かず、此に以てか磯田大隊長憤然として馬を躍らし大喝一聲、大隊の前進を令す。

天柱裂け地軸覆り慘憺たる修羅の巻を現出せんとし。桑葉の間豆の如き黑影縦横に馳騁するを見る。

此に於てか敵既に急ぎ退却し疾走すると雖我軍の勇敢なる猶追ふて止まず我が劍既に彼の背を貫かんとする幾度ぞ。喊聲雷の如く起り敵軍は

一小村の裡に蔽はれて粉碎せられんとする刹那可惜、平和を告ぐる体戦喇叭響き渡りぬ。時に午后三時十分。暗雲名残なく野邊より晴れ渡りき、

やがて休息半時間の後大隊長の講評あり曰く

○講 評

一本日の演習は先きに示せし一般の想定并に大隊命令にある如く行動せし考なり

一我が主とする目的は手取川の左岸に據る敵の右翼を脅威するにあり。而して鶴來町に在りし敵の小部隊は我が前衛の力を以て撃退したり即川を背にせし敵は小部隊なりしを以て我前衛は之を退くることを得たりしも川の對岸の敵は稍有力なりしを以て我れ亦宜く務めたり。對岸、橋の上方は丘陵續き又その背後も

險阻にして敵の占據を許さず故に敵は橋梁より下方なる堤防に據れり。故に我が大隊は主として其下方より攻撃したり。復た此方面よりすれば敵の退路に迫るの利ありしなり

一鶴來松任間の往來に在りて本隊の敵を射撃したるも我軍の渡橋を援護せんとすると共に敵の退路を撃たんが爲めなり。

一逐次二回村落附近の戦あり、最初是我一個小隊と假想一個中隊とにて退け、最後のは敵全力を盡して防戦したる爲め、我全軍を以て之に當りたり。

一斯の如くして我か大隊が撃たんとせる敵に退却せしむることを得たり尙北陸街道方面には本軍戦闘をなしつゝあるを以て爲し得れば攻撃を續行するの希望を有せしも演習を中止すべき時機來れるを此に演習を終結すること、爲せり

一先つ今晚は辰の口村に一泊す可し。講評終り。猶諸子に告ぐ諸事宿營に就ての心得は充分實行あらんことを望む。

○宿 泊、

菜花黄昏がれて輕烟園樹をこめ、鳴蛙暮鐘に和するの時、辰の口に着きぬ敵味方共に相談笑し、各其定められたる宿泊所に入る。

階上の欄干に銃を列べ、或は靈泉に浴して今日の功名話に我を忘るあり、浴し終りて椽に出で校歌を歌ふあり、五百の健兒皆靄然たる嬉色ありき然かも晝間の激戦に、驅馳してや疲れけん稍夜更くる頃には各旅宿寂として聲なかりき。

○出 發。

明くれば四月十四日、嘹唳たる喇叭の聲、突如として健兒の夢を破れり。起つて空を眺むれば暗雲低く庭の梧桐を壓し翠柳雨を含んで戦がす晩春の景轉傷魂せしむるものあり。

午前七時宿舍前に整列す。細雨既に征衣を濕し、簷滴落花に洒いで春禽悄として聲なし。既にして歩武肅々として發す。

蔬畦村徑殘花を點せざるなく一簇の烟林遙に雪消ぬ殘る山を遶るが如くして龐なる雨に蔽はれぬ。學校へ通ふ吳座着たる小兒、機織りに通ふらしき乙女などに逢ふ。

手取川を過ぐ。流水空しく落花を浮べてや行くらん。上流は屈曲して見ねぬ。昨日火花を散らして兩軍の奮闘せし所、今や平和なる天狗橋上、前に鶴來町の静けき山街を眺め遙に淡き翠りの三輪山倉ヶ嶽を望む、又多恨の景ならずとせんや。

松任に着す。此處にて午食す。名物のあんころを背囊に入れて獨り微笑む友あり。友への土産か妹への土産にやあらん。

此日や雨終に止まず、即演習はせざる事となる。腕を撫して腓肉の嘆を發せしものありやなしや。

松並木茂れる街道を過ぐ。松の下露はらくと帽檐を打ち頬を濡ほし、軍歌の聲到る處に響く。願れば麥深うして驛馬の影微かなる所倉ヶ嶽依々として吾を送り、我が前途には松高うして峭壁聳えたる金澤の古城我等を迎ふるが如く立てり。

○歸 校

午後四時泥路を踏んで我校に歸る。運動場に於て大隊長檢閲し終りて後今日雨天にて演習無く隨つて講評をなし、唯諸子が宜く校規を守られしを満足する旨告げらる。

次て校長の諭告あり諸子の勞を慰めらる。此に於て大隊は散開せり。時習寮に歸るもの、家に歸るもの、三々五々相伴ふて去りぬ。運動

從 軍 餘 談

○兩先生戰爭を忘る。

場裡唯勇士の踏み破りし草鞋のみ點々たり。かくして本年度の行軍は終りぬ。(や、ふ) 三ツ口村の激戦既に始まり砲聲諸處に轟けり。其間を平然として行く二人の紳士あり、砲聲を耳にせざるものゝ如く四邊を顧みて『横濱行き』の陶器と云つて西洋人向きのもある……』思ふに談は日本陶器に就きてなるが如し此吞氣なる二人を誰とかなす、曰く耳傾くるは西田先生、語るは實に紫影藤井先生。

○校長の馬、磯田大隊長の馬

校長と磯田大隊長と馬に乗りて運動場に出でらるゝや、借馬と云ひて嘲けるが如き人あり。蓋し此馬の眞價を知らざるなり。校長の馬は實に大島師團長の愛馬此師團八百頭の馬の中にて比す

可き無しと稱せらる。磯田大隊長の馬は實に當師團參謀長の愛馬たり又他に遜色なき名馬なりと云ふ。兩先生の得意誠に想ふ可きなり。

○吉崎先生誤つて女湯に入る。

吉崎先生の辰の口に着くや、各少隊宿泊の部署などを見終り、直に疲れを休めんとや風呂場に向く。一ツは學生多くして騒然たるも隣りの風呂は寂として人影なし。先生快浴一番窃に其好都合を喜ぶ何ぞ計らんこれ女湯ならんとは。

○今井先生の馬乗り。

校長既に辰の口より歸らるゝや馬に乗る者なし、遂に今井先生乗らるゝ事となり。其肥大なる体は鞍上に安置せられぬ。演習終りて歸校するや、校長靜勝館の側に迎へらる、今井先生校長と顔見合せつつ莞爾として『今日は御山の大将だ』

○一色曹長泥水を飲む。

りと雖何條撰手に及ばんや、見る見る追ひ付られ劍を以て背囊を突かるゝに至る、而して此悠悠々として後より突かれし沈着なる勇士を誰とかなす、曰く我等の先生、姓は河合名は義文。

○退却の趣味

同じく三ツ口村の役にて、獨法二年の面々皆逃走す。彼等の一人曰く『支那人が逃げるのも無理はない、逃げるのも仲々面白いからなア』

第八回春季水上大運動會

記事

日露遇々釁を開き王師狂賊を膺さんとして、滿韓の野に醜艸を踏み碎き勃海の沖に荒波を蹴破りて、今や旭旗の影うらゝかに馳せ向ふ所また敵なし、此時此際我等青衫の身一層體を練り氣を養ひ以て我が日東帝國の昂天の元氣を發揚すべきなり。宜なる哉、我北辰會、麥隴の綠、菜圃の黃、眼に快く心に爽やかなる四月廿四日を期

曹長一色誠次郎君元來健脚を以て鳴る。一日五里を行けば即疲勞しつくして言語出でざるに至る。此度の役や身曹長となり傳令を務め東西に馳せ大に大隊に重きをなせり。然かも遂に疲労の極一步進む能はず臥して田畝の泥水を飲む。

○謙遜なる小隊長

小原小隊長仮想敵と爲りて手取川に陣す。其率ゆる兵士は是れ多く千軍万馬の中を歴來りし老武者のみ、小隊長の命令に耳傾けず自由行動をとるもの多し。此に於てか小原小隊長一人一人に命令否依頼して曰く『君はあらちに散つて呉れ給へ』

○二部競走の選手

三ツ口村の役にて、我が大隊敵を追撃するや、二部の競走の撰手、西、小林、加藤の面々得意の健脚を以て敵を追ふ、敵必死を極めて逃げた

して例の如く大野川に第八回春季水上運動會を舉行せんとの議成りぬ。多年鍛ひし鉄腕を揮ふの機なきに空しく撫して脾肉の嘆に頼みたる我校六百の健兒等しく奮ひ立ちて、學業の餘暇砂塵渦を卷く金石往還を既に斜陽を仰いて行き遅く星影に浴して歸り、練漕をさゝ／＼怠なかりき。

殊に昨春は事情の爲めに競漕會の花を以て目されたる撰手競漕の行はれざりし反動として今回は早く既に鬱勃の霸氣制し難く、餘勢高く天をも衝かむとするの概ありき。早くも各部撰手は至大の名譽と責任とを双肩に擔ひてまた練習に寧日なし。』

時は來りぬ。四月二十四日、噫されど天無情にして當日陰晴定まらず密雲を鎖して今にも降り出でなむ氣色なるに一日延期するの止むを得ざるに至りぬ

翌くれば二十五日、天なほ曇りたれども時に旭

日積雲の間に織顔を顯はせしかば、校庭に於ては高く二發の砲聲天に轟きて開會を滿都に報じぬ、されば早朝より每半時數臺の鉄道馬車は乗客を滿載して金石に馳せぬ。

昨春新に就りし大野川の右畔なる艇庫上の露臺には校章美はしき幕を以て引圍らされて賞品授與席及び來賓席に充てられ万国々旗は麗らかに翻翻として其上を飾りぬ。艇庫内には仕度場及衛生係席あり、又對岸には審判席の設あり此に時習寮休憩場あり、一小流を隔て、第三部休憩場ありて三部旗の翩々たる影を水上に落せるを見る、露臺の上より當日の戦場を望めは大野川は岸を漲れむばかり、漫々の流緩やかにして小舫輕舸觀覽に聲援に舳艫相摩し來往織るか如し、北岸は角ぐみ初めたる蘆茅の綠深き堤上には數十の國旗海風に翻り其盡くる所遙かに遠く交叉されたる旗は出發点を示せり、

南岸は疎林を隔て、麥隴菜畝の綠浪黃波は遠く五郎島村を浮べ後方遙かに縹渺たる砂丘に連れり、眸を北に放てば万頃の水田遠く參差たる列樹村舎に限られ皚々たる皓嶽の群峰は其麾下に起伏せる連山を抜き巖然として碧天に聳えたり。午前九時四十五分銃聲一發第一回の競漕は始められぬ、軍樂隊が嚙曉たる樂聲は遠く水面を渡りて絶えず漕手を慰め勵ませり。

以下例に依り順を追ふてその概況を記述せむ。第一回、柏手喝采に送られ艇旗を醫王山嵐に打ち靡かせて、新裝美はしきかりかね、ちどり、はやふさ、の三艇は相前後にて出發点へと溯りぬ、艇上の勇士破顔一笑各ひそかに期待するものあるか如し、今や人々は眼を上流に注ぎて此初回の競漕如何にと乾津を呑み出發の號砲を鶴首して待ち構へたり、待つ間程なく轟き渡る砲聲に三艇共に浪を蹴つて發しぬ、初めは三艇等

しく進みしもやかて赤艇は白の第一航路を奪はんとして右舷に出てんとして餘勢右岸に迫りしかは狼狽して更に艇は左岸に偏しぬ、第三航路を進みし青も亦千鳥足なりしたため比較的直航し流勢に乗入れたる白は青を抜くこと三、赤を制すること四艇身にして決勝点に入り當日第一の桂冠を戴きぬ、(安江安吉、山内秀一、矢口長三、吉田孫作、河野喜三、堀内彌二郎、森田桂三)

第二回、初め赤艇最も優勢なりしも中途余りに急に青の航路と奪はんとしたる爲め反つて此に制せられて二艇身半を敗れ、白は終始見事に殿して決勝点に入りし時赤後るゝこと尙一艇身半、(小和田嘉一、栗本快一、淺見與四藏、金澤熊男、下野遠善、千秋寛、矢田豊)

第三回、白は殆んど直航したるも惜むべし流勢を利するを知らざりし爲と「オール」の不整ありしたために敗れ、赤は左岸に偏し過ぎたるに、中路

を進みし青は漸次強敵赤の航路を妨げて危くも半艇身を勝ちぬ(下村茂、前田滿多雄、松橋紋三、栗林豊作、富岡教雲、藤岡兵一、櫻井正矩)

第四回、三艇共に巧に河流を應用して相並進したるも五百米突を過ぎて第三航路の白艇は敏捷にもよく青の第二路を制して一艇身半の勝を得ぬ、此競漕に於て三艇の力相伯仲にありて蛟龍玉を競ふの壯觀を呈し、初めて觀客の溜飲を下げしめたり、然れども赤は始よりやゝ遜色ありしか如かりき、(栗本快一、板谷吉二郎、得能佳吉、菊池信二、矢口長三、大塚眞二郎、安田長吉)

第五回、第二航路の赤初より活氣あり、これこそと思ひしに三百米突を過ぎて白の第一路を奪はんとし首尾よく目的は達したれども、惜むべし餘勢は艇を右岸によせ河流の外に脱したると航路を迂回せるため漕手は早くも疲弊して百米突を餘すに及び權調亂れぬ、唯第三航路の青は

其スタートの巧なりしと白赤の奮闘の爲め優々赤を抜くこと三艇身とは呆氣なかりし、(五藤重晴、芝沼榮作、清水與七郎、關格之助、下野遠善、猪狩恭介、高澤壽)

第六回、中流に乘入りし第一航路の赤は終始他の二艇を制して青を抜くこと二、白をぬくこと五艇身にして決勝点に入りぬ、(藤田孝四郎、後藤幸太郎、加藤虎之助、小澤民治、小泉禎次、木田芳三郎、山崎亮五郎)、

第七回、第一航路の青は先づ最も後れたる赤の第二航路を奪ひ、次ぎて白の第三航路をも断じて三艇身勝ちたり、(増田雷助、藤田孝四郎、高秋飾、千代嘉一郎、前田満多雄、山中三郎、本間喜輔)時既に午に及ひしかば午食の爲め休憩、午後一時十五分第八回より順次競漕を行ふ、今や露臺の上、兩岸の堤全く帽傘の影に埋められぬ、危かりし空も既に晴れて日は高く暑きまで輝き

たり、折柄憎くや海風も漸う吹きすさみたれども逸興愈々酣なり。

第八回、三艇其方殆んど相如きて初めは何れとも分かざりしが三四百米突に及びて共に皆右岸に偏したれば第一航路をとりたる赤は壓迫されて、岸邊にもやへる小舟の間に頭を突込みて今更藻掻けど其甲斐もあらばこそ遂に断念の止むなきに至りぬ、然るに青の漸く疲勞せんとするを見てとりたる白は奮勵突進中流の利に乗じて四艇身をぬきぬ、(奥田祐安、中野並助、桑原政榮、金尾唯敏、淺見與四藏、涌井廉平、吉澤謙太郎)

第九回、當日斯くも複雑なる競漕は此のみ、相伴ひて發したる三艇は三百米突に及びて漸く何事か語らひ初めたり、第二路の白と第三路の赤とは早くも權の手を握りあひぬ、其間に青は獨り進みて今や漸う分れて競漕に入れる白の航路

を奪はんとして艇を曲ぐることを餘りに甚しかりしかば白の進路を横断して此度は赤と握手しぬ、權と權と堅く結びて解けざるにや、後れたる白は力を得猪進して勝を博したれども其航路の右岸に偏したるは義理にも見事の勝と云ふ能はず、青は早く既に断念したり唯赤は餘勢侮るへからざるものありしにも拘らず、二回の握手に舵手は自失したりけむ右岸に向ひたれば初め最も頼母しかりし赤も終に二艇身餘の敗を招きぬ、漕手の無念察すべし、(渡邊周、長部文三、高橋謙三、島田朋三郎、松橋紋三、荒木彦弼、柳沼廣三)

三)

第十回、第二航路をとりし青は初めより優勢にして苦もなく赤の第三航路を掠奪し第一航路を直進せし白をも難なく制して猪突し來るに人々審判官の手に青旗の翻るべきを期し居たるに、こは何事ぞ！青に後るゝこと四艇身なりし白の

決勝点に入るに及びて初めて白旗は打振られ號砲は轟きぬ、人々の恠むも道理青は第二浮標を過ぎざるに早くも白の第三航路に入り審判規則に抵觸したるか爲あたら功名も空しく此を逸したるなり、勇躍せる漕手が落膽見たるも氣の毒なりき、こは全く舵手が輕卒の致せる所なり。

(有馬英二、清水徳太郎、得能佳吉、小山永顯、高橋克己、安部良吉、堀尾成章)

第十一回、スタートの折より既に赤青白の順序にして青白共に勉めたるも白終に青に及ばず青また赤に及ばずして赤旗は振られ砲聲は耳を劈きぬ。(生井洸、藤田孝四郎、東郷外人、里見寛二、栗本瀬兵衛、小川堅二、藤澤廉之助)

第十二回、スタートより氣勢昂りし赤艇は間もなく青の第二航路を占有し、頓に衰へる白を苦なく後にして優々凱歌を奏しぬ。(金尾唯敏、千秋寛、加藤虎之助、渡邊清、立松省三、大野奥三)

郎、伊部榮二)

第十三回、初め赤艇甚だ有望なりしも右岸に寄せたれば潮流の利を失ひ、中流を下りし白は初より意氣舉らさりし如く、第三航路をとりし青は途中二回も小舟の妨ぐる所となりしも尙危ぶき勝を占めぬ、三艇相去ること僅に半艇身、虎鬪龍撃眞に壯觀を極めたり敗者また榮ありと云ふべし。(西村好時、中村、小泉禎二、中村正)

第十四回、第一航路の青、第二航路の白共に圓滿なる曲線的美を画きて進行せしかば見事敗をとり、比較的航路の直線なりし赤は白に一艇身半を勝ちたり。(中山千穎、菊池信二、安達勝雅、下野遠善、佐倉八十松、田中八百八、河野喜三)第十五回、時習寮の南、中、北寮の撰手競漕なり、各寮生我が寮艇の聲援に聲を囁らして狂奔す、第一航路中寮の白艇は奮勃たる野心に馳ら

れてはや早くも北寮青艇の第二航路を奪取せんとして艇を曲ぐることに甚だしかりしかば其目的は達しながらも見る間に後れて力漕勉めたれども終に殿せり、第三航路をとりし南寮の赤艇はスタートに於て既に敵を制したれば白青の奮闘を斜眼に眺みながら切齒奮勵せる青を抜くこと尙半艇身にして決勝点に入りぬ。(南寮撰手加藤周造、藤田圭太郎、松橋好二郎、山田正三、倉内松造、飯森梅男、原恭三)

第十六回、第三航路に位せし青は河流に乗せんとて中流に艇を突入したり、折から第一航路の白も赤の第二航路を奪はんとて進み來りしかば兩艇は漸く接近して決勝線前五十米突に及びて終に抵觸して又解き難く權を交へながら決勝線にもがき入りしも既に遅し先には遙に後れたりし赤艇此様に力を得て奮ひ立ちしかば尙二艇身以て青を制しぬ。(加藤周造、星政一、神保金衛、

安達勝雅、高橋克己、森川昌一、國峰專吉)

第十七回、中位をとりし青は初は白にやゝ後れたりしも四百米突に及びて終に此を制せんとしぬ、折柄赤は右岸に擱して意氣消沈遂に漕く手を止めたり、今や桂冠は青白の競ふ所となりて青白の競ふ所となりて青は強漕甚だ力めたりしかは見るゝ其敵にあらざる白を抜きぬ、白は決勝線前二十米突にて意氣地なくも艇を流に任しぬ。(大和田信吉、小川堅二、金澤巖、江川茂雄、得能佳吉、矢田豊、川上朝吉)

第十八回、中學撰手競漕なり、初め石川第一及び富山高岡の三中學校より出漕の筈なりしも高岡中學は遂に加はらず、他の二校の競漕となつて戦場は甚だ寂れんとしたれども何がさて二校か撰びゝし撰手の花々しき合戦、此こそと人々手に汗を握りぬ、今至大の責任を負ひたる撰手は各校の重望を囑せられて艇に上るや其校生

は拍手此を勵しつ天晴の勝利を祈念しなから見るゝ上流に漕き去る艇を目送したり、やがて一聲の砲聲と共に各艇はオールに満身の力をこめて漕き出でぬ、初は二艇殆んど並進したるも四百米突に及びて富山中學の赤は石川第一中學の白を制すること既に一艇身早くも頼み少なの形勢となりしも白艇の勇氣なほ沮喪せず強漕最も發奮したれども間なく其進み來りし第二航路を占められて果敢なくも四艇身の敗を招きぬ。白艇の撰手は何れも弱冠可憐の少年にして數日來練習甚だ勉めたれども見るからに逞ましき青年が鉄腕の力には遂に及びす口惜しくも敗れたるなり。(牧野孝七、石川玄知、藤田清太市、齋藤太吉郎、大浦芳治、長谷川清人、高澤貞義)

第十九回、來賓競漕にして赤艇には金澤醫學專門校の職員諸氏白艇には石川第一中學校の職員諸氏乗組あり、昨春の競漕には危くも石川第一

中學の諸氏が勝を占むる所となりしかば本年は勝ちたるは甲の緒をしめ敗れたるは汚名を雪かむもの何れも遙に二里の道を遠しともせで漕漕をなし怠なかりき、今は既に各頼む所あるもの如く漕く手勇ましく艇は流を溯りぬ、各校生は喝采して其行を盛にし輕舟を飛ばして應援甚だ勉めたり、勝負如何にと見やる彼方出發点に當りて一團の白煙上るよと見る間に砲聲は轟きぬ、赤艇は既に發して浪を破つて進み來るに白艇は如何にしつる靜かに波上に漂へるか如し、やかて一分も經ぬるに漸う權は白浪をあげぬ、此時赤は既に遙かに進み來りて白は如何にあせるも如何に奮ふも最早詮なし、赤は周章せず急がす靜かに後を顧みながらも安々と決勝線に入りしは呆氣なし、聞けば白艇の發せんとせ

る時浮標の綱堅く舵にかどまりて艇は進まず、依つて審判係は不取敢赤に中止を命じたるも既に遅く其功なかりしかば止むを得ずその回歸を待ち居たる白に發艇を命じたる次第なりといふ。此を當日第一等の漁父の利となす。(小川勝信、石川喜直、宮田篤郎、辻本辰之助、太田友一、月原秀範、須田嘉三郎、)

第二十回、白は初めより優勢にして二百米突に及び早くも青の第二航路を奪取して中流に乘入れしかば四百米突に於ては青をぬくこと既に四艇身、他の二艇も茲を先度と奮戦せしも大勢は己に決したり、骰子は既に投げられたり、白は青をぬくこと四艇身、青は赤に先んずること亦四艇身、青赤は到底白の敵手にあらざりしなり。(盛賢藏、次木茂、神谷吉兵衛、田中八百八、小野徹照、水野重功、松橋紋三)

第二十一回、待ちに待ちたる撰手競漕なり、日は早くも華やかなる殘紅を天涯に浮遊せる一團の夕雲にうつして虞淵に没して、暮靄遠山を罩

め四顧漸う暗淡たり、各部撰手は部生に送られて艇に上りぬ、數週日來の遠漕強漕に鍛ひ上げられたる鐵腕を撫して鬱勃たる意氣抑へ難きもの、如し、その日にやけて見るからに雄々しき顔上には凜乎たる霸氣の輝ける勇しきよ、既に艇は夕風に艇旗を翻めかして發せんとす、各部生は水上に輕舸を飛ばし岸上に旗を押樹て我が部こそその撰手に至重の希望を囑しつゝ應援に我を忘るゝばかりなり、整然たる權は水を蹴つて見るゝ艇は相次ぎて薄暮の中に漕ぎ去りぬ、よく勝を制し當日第一の名譽の月桂冠を戴かむは陸上運動會の霸王第二部か、將た初より元氣最も旺盛なりと稱せられし第一部か、或は一昨春の競漕會に漁父の利を得たりと嘲けられし第三部か。今や一分一分勝敗の機は迫りぬ、岸上舟上赤白青の聲援旗は觀客或は學生の手に振られ入り亂れて紛々たる様の勇ましさ、衆目

は一齊に上流に集められ今やゝゝと其發艇を待ちわびぬ、然れども如何せん暮靄漸う深く艇影を没してまた遠く望むによしなし、此方には唯甲論乙駁其勝敗を議するのみ、やがて遙かに闇を縫ふて一閃の火光煌めくよと見る間に一發の砲聲は此最も勇ましく競漕の開始を報じぬ、双眼鏡をとりて望めは幽かにも各艇の一齊に權の翼を張りて大空の如き水上を翔けり來る壯觀實に言語に絶するばかりなり、此より先漸う吹きまさりし強風は今や其絶頂に達してすさまじく荒れに荒れたれば艇は常に右岸に吹き流されんとす、漕手の勞思ひやるべし、見よ、第三航路をとりし第三部の青艇はスタート最も巧妙にして茲に於て既に他の強敵に一撃を加へたるもの如く、真先に飛び來るに白赤もさるものいかに彼等に敗れむと早くも強漕に移り鍛ひゝし手並を顯はさむは今ぞと縦横に奮闘したれと

も尙青は勢猛に進み來る、水陸には旗をふり聲を勵まし應援今を盛なり、刻一刻最後の運命は近づきぬ、決勝線前二百米突に於ける各艇の力漕の勇壯奮戰の激烈は如何なる言辭も此を遺憾なく名状する能はざるなり、舟に岸に漲るゝ斗りの觀衆今は齊しく堅津を呑みて高き呼吸だにするものなし、すはや此至大の名譽を双肩に負はむは白か白か將た青か、轟然一發の砲聲擧るよと見れば審判官の手中には青旗の翻々として烈風に靡けるを見る、嗚呼第三部青艇の勝ちたるなり、其瞬間拍手の音は歡呼の叫と和して天地も揺かむばかり、三部生は等しく岸に馳せ集りて撰手腕上に餘念もなし、第三部は一昨春の撰手競漕に於ても亦天晴勝を制したれども遺憾にも其華やかならざりし爲め漁父の利を得たるなり實力の勝利にあらずと輕侮の中心となりしも今回の勝利の立派さには何者も賞讃の辞を惜ま

ざるべし、終始さしもの強敵に魁して隆々たる名譽を博したる心地よきよ、今や陸上運動會の霸王は第二部にして水上運動會の盟主は第三部なりとは衆人首肯する所ならん（第三部撰手増田雷助 高安慎一、藤井正太郎、有馬英二 奥田祐安、植山六之助、桑原政榮）此にて第八回春季水上大運動會は圓滿に其終局に達したり、人影漸う朦朧にして水面愈暗淡、海風は益吹き荒れて當日の戦場を吊ふか如く闇中欸乃の聲さひしく江を渡りて人の腸を斷つ。（き、け）

今試に當日二十一回の競漕の中勝を占めたる艇と航路と色とを擧ぐれば、

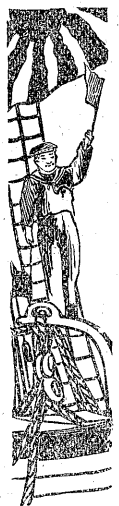
航路	第一、八回	第二、四回	第三、九回
艇	かりがれ、	ちどり	はやふき、
	十回	七回	四回

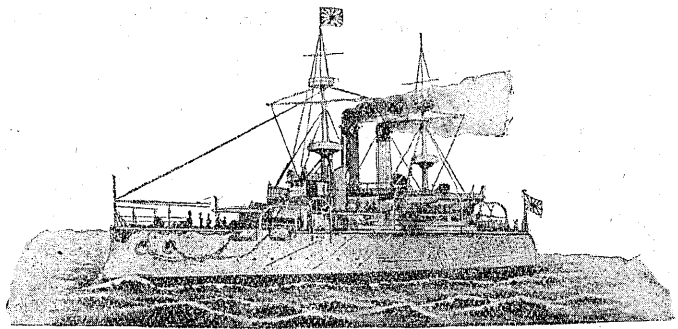
赤、七回
白、八回
青、六回

寄贈雜誌（北辰會宛）

龍南會雜誌	百三號ヨリ	第五高等學校全會
校友會雜誌	百六號マテ	千葉中學校全會
無盡燈	一號ヨリ	無盡燈社
十全會雜誌	六號マテ	金澤醫學專門學校全會
國士	三十三號マテ	造士會
江原	二號	熊本中學校々友會
信仰	一號ヨリ	淨土宗傳道會
六稜	五號マテ	北野中學校々友會
縮々會雜誌	二十四號	福岡縣中學明善校全會
華陽	八十六號	岐阜中學校全會
九十九會々誌	三十三號	成東中學校全會
京華校友會雜誌	三十四號	京華中學校全會
保惠會雜誌	六號	松山中學校全會
躬行會叢誌	八十二號	躬行會
嶽水會雜誌	十三號	第三高等學校全會
七生	十四號	島根縣第三中學校全會
尙志會雜誌	二十七號	第二高等學校全會
	二十八號	
	二十九號	
	六十號	

校友會々誌	五號	第六高等學校全會
修養會雜誌	七號	高田中學校全會
輔仁會雜誌	六十二號	學習院全會
同窓會報告書	三十一號	安積中學校全會
校友會雜誌	三號	山口中學校全會
坂東太耶	三十八號	前橋中學校々友會
一橋會雜誌	四號	東京高等商業學校全會
學友會報	二十五號	山口高等學校全會
學友會雜誌	二十六號	第七高等學校造士館全會
校友會雜誌	一號	麻布中學校全會
校友會雜誌	十四號	柏原中學校全會
學友會雜誌	三號	明治義會中學校々友會
遷	三十五號	第一高等學校全會
校友會雜誌	百三十三號ヨリ	岡山醫學專門學校全會
校友會雜誌	百三十六號マテ	大垣中學校學生會
藥城文庫	二號	
	十五號	





投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せごも姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十七年六月二十日印刷
明治三十七年六月廿四日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

吉村政行

石川縣金澤市早道町五十六番地

生沼倍男

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

明治印刷株式會社

同縣同市高岡町九十番地

發行所 第四高等學校北辰會

